上長瀬遺跡発掘調査報告

2014（平成26）年２月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は三重県名張市に所在する上長瀬遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、道路改良事業（国）368号（上長瀬拡幅）に伴う。A地区については、三重県教育委員会が三重県県土整備部から依頼を受けて実施し、B地区については、工事立会で実施した。

3．調査の体制等は次の通りである。
　調査主体　三重県教育委員会
　調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　【A地区】調査研究１課　主査　谷口文隆　萩原義彦　星野浩行
　【B地区】調査研究１課　主査　谷口文隆
　整理担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課
　A地区調査土工受託機関　橋本技術株式会社

4．調査期間及び面積は次の通りである。
　【A地区】平成24年７月25日～平成24年10月16日　　781㎡
　【B地区】平成24年12月17日　　80㎡

5．調査にあたっては、地元の方々をはじめ、名張市教育委員会、三重県県土整備部道路建設課、伊賀建設事務所の多大な協力を得た。

6．当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究１課が行い、本書の執筆・編集は谷口が行った。

7．報告書作成にあたって、愛知学院大学教授　藤澤良祐氏からご教示を頂いた。

8．当地は平面座標系第Ⅵ系に属しており、本書での方位は座標北を使用している。
なお、座標値は世界測地系2000に基づいて表示している。

9．遺跡地形図及び調査区位置図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て、同組合所管の「2006三重県共有デジタル地図(数値地形図2500(道路縁1000))」を使用し、調整したものである。（承認番号：三総合地第93号）

10．当発掘調査の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化センターで保管している。

11．土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖（21版）』（1967年初版、1997年第19版）による。

12．本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。
　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑

本文目次

Ⅰ　前言・・・1
Ⅱ　位置と環境・・・2
Ⅲ　層位と遺構・・・6
Ⅳ　遺物・・・17
Ⅴ　結語・・・30

挿図目次

第1図　遺跡位置図・・・4
第2図　遺跡地形図・・・5
第3図　調査区位置図・・・5
第4図　A地区平面図・土層断面図・・・7
第5図　B地区平面図・土層断面図・・・10
第6図　SB46・SK14実測図・・・11
第7図　SB47実測図・・・12
第8図　SB48・SK25実測図・・・13
第9図　SK26・SK45・c9pit4・d10pit2実測図・・・14
第10図　出土遺物実測図①・・・20
第11図　出土遺物実測図②・・・21
第12図　出土遺物実測図③・・・22
第13図　出土遺物実測図④・・・23

表目次

第1表　遺構一覧表①・・・15
第2表　遺構一覧表②・・・16
第3表　出土遺物観察表①・・・24
第4表　出土遺物観察表②・・・25
第5表　出土遺物観察表③・・・26
第6表　出土遺物観察表④・・・27
第7表　出土遺物観察表⑤・・・28
第8表　出土遺物観察表⑥・・・29

写真目次

表紙　・・・32
写真図版1　A地区区全景・・・33
写真図版2　個別遺構・・・34
写真図版3　個別遺構・上長瀬遺跡周辺地形・・・35
写真図版4　個別遺構・B地区全景・・・36
写真図版5　出土遺物・・・37
写真図版6　出土遺物・・・38
写真図版7　出土遺物・・・39
写真図版8　出土遺物・・・40
写真図版9　出土遺物・・・41

Ⅰ 前　言

1　調査に至る経過

国道368号線は名張市を南北に貫く重要な路線である。上長瀬地内は幅員が狭いためバイパスを整備し交通の円滑化を図る必要があり、道路の拡幅に至った。道路２km、橋梁工３橋の工事である。

この事業の照会を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、遺跡登録はされていないものの、遺跡の可能性がある箇所として、県土整備部と協議をし、平成24年１月24日に工事立会を行った。その結果、検出面において遺構及び遺物が出土したため、名張市教育委員会に報告し、遺跡として登録されるに至った。さらに県土整備部と協議を進め、781㎡（Ａ地区）について発掘調査を実施した。

また平成24年11月７日に行った工事立会による範囲確認調査において、若干ではあるが遺物の出土がみられた80㎡について、15日に道路延長部分の工事立会を行い（Ｂ地区）、記録保存することとなった。

2　文化財保護法に関する諸手続

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

○　三重県埋蔵文化財保護条例第48条第１項
・平成24年７月５日付　賀建第5027号
三重県知事から三重県教育委員会教育長あて
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（上長瀬遺跡）
○　三重県埋蔵文化財保護法条例第48条第２項
・平成24年７月12日付　教委第12－4044号
三重県教育委員会教育長から三重県知事あて
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」（上長瀬遺跡）
○　文化財保護法99条第１項
・平成24年７月31日付　教理第158号
三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて
「埋蔵文化財発掘調査の報告について」
○　文化財保護法第100条第２項
・平成24年10月18日付　教委第12号－4413号
三重県教育委員会教育長から名張警察署長あて
「埋蔵文化財の発見について（通知）」
○　文化財保護法第100条第２項
・平成25年１月25日付　教委第12号－4428号
三重県教育委員会教育長から名張警察署長あて
「埋蔵文化財の発見について（通知）」

3　調査経過

Ａ地区　本調査の開始に先立って、平成24年４月９日に道路側溝の工事立会を実施した。この工事では、工事の掘削が遺構検出面に達することなく終了した。続いて本調査の進め方について、６月20日に県土整備部と協議を行い、７月24日には本調査土工受託機関である橋本技術株式会社と現地において協議を行った。調査区までの工事についての工事用道路が調査区内に設置されていたため、調査はその除去から行った。８月６日～８日で盛土を除去し、９日より重機による表土除去を行った。16日に表土除去が終了し、20日より人力による遺構検出及び遺構掘削を開始した。30日に当初の調査区範囲の南端部で焼土を含む土坑（ＳＫ45）が検出されたため、９月４日に南部東側を重機及び人力で約25㎡拡張したが、拡張部には、ほとんど遺構は検出されず、５日にほぼすべての検出を終了した。７日に全景写真撮影を北と南の２方向から行い、10日～20日の間で実測を行った。23日には現地説明会を実施し、43名の参加を得た。10月３日には県土整備部への引き渡しを行い、現地での調査を終了した。

Ｂ地区　名張川と国道368号線に挟まれるＢ地区の調査については、工事立会のため、工事の進捗に合わせて実施した。15日に重機掘削、人力での遺構検出及び遺構掘削、写真撮影及び実測を行い現地での作業を終了した。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

上長瀬遺跡（1）は名張市上長瀬に所在する。名張市は南北に細長い三重県の中央西端にあり周囲を山々に囲まれ、中央部を流れる名張川及び支流の宇陀川沿いに小盆地が形成されている。上長瀬は名張市の南部になり、名張川上流にあって、津市美杉町太郎生に隣接している。名張の平地部からは約4㎞離れた山間で、平地部が標高約200mに対し、上長瀬は標高約330mである。さらに名張川を約2㎞上流に遡ると、西に倶留尊山、東に大洞山と、ともに標高1000mを超える急峻な山の間を抜け、奈良県御杖村に入る。上長瀬遺跡はこの名張川上流の右岸段丘上に立地し、現況は水田である。

2　歴史的環境

縄文時代に関して、調査区より下流では、2.5㎞下った下垣内遺跡（2）で石鏃が、西畑Ａ遺跡（3）、西畑Ｂ遺跡（4）でサヌカイトや石鏃、石槍、片刃石器が採取されている。上流では、津市美杉町太郎生において、多くの遺跡が確認されている。境ヶ瀬Ｂ遺跡（5）からは押型文土器が、立道遺跡（6）、南遺跡（7）からは縄文土器が出土し、石鏃は境ヶ瀬Ａ遺跡（8）、山之田遺跡（9）、太郎生登り遺跡（10）、下切遺跡（11）で、見つかっている。さらに、サヌカイト片は、日神Ａ遺跡（12）、日神Ｂ遺跡（13）、まとば遺跡（14）、太郎生萩原Ｂ遺跡（15）でも見つかっている[1]。上長瀬の上流においても下流においても、この時代の生活圏が名張川流域において、広く広がっていたことが考えられる。

弥生時代に関しては、上長瀬を含む名張川の山間部流域において現在のところ、この時代の遺跡は見つかっていない。名張川流域での弥生時代の遺跡は、山間部を抜けた約10㎞下流で、そこまで下ると、平尾山遺跡、下川原遺跡、坊垣遺跡など多くの遺跡が所在する。この時代、一説には、名張の盆地に発達した弥生文化をもつ人々と、名張川の山間部に生活した、太郎生より下ってきた弥生文化をもたない人々との、部族の違いも推定されている[2]。

古墳時代に関して、上流において、まとば遺跡で須恵器片が1点採集されている[3]。下流では、2.5㎞下った段丘上に、横穴式石室を持つ6世紀後半から末の円墳である兼前1号墳（16）が名張市の最東端の古墳として立地している[4]。それより東、名張市内における名張川上流においてはこの時代の遺跡はみつかっていない。

古代に関して、上長瀬は伊勢神宮領であった「六箇山」に属していたとみられている[5]。「六箇山」は名張川上流部山間部にあり、承平4年（934年）の伊賀国夏見郷刀禰解案により、東は阿保（現伊賀市青山町）、南は伊賀見（現奈良県宇陀郡曽爾村）・神末（現宇陀郡御杖村）、西は夏見川付近、北は青蓮寺以東の地域であるとされている。伊賀国夏見郷刀禰解案には「長瀬」の名は見られないものの、神領地の中で現在地不明の「針生」が長瀬であると推定されている[6]。

中世に関して、上流の美杉村太郎生において、境ヶ瀬Ａ遺跡、境ヶ瀬Ｂ遺跡、太郎生登り遺跡、まとば遺跡など、ほかにも多くの遺跡から土師器、瓦器、天目茶碗の出土が確認されている。南遺跡で1点、太郎生登り遺跡で2点山茶椀片が採取されているものの、瓦器片が圧倒的に多く、畿内の文化圏であることが窺われる[7]。また調査区のすぐ近くに国津神社が所在し、その隣に上長瀬庵と呼ばれる小堂がある。そのなかに阿弥陀立像石仏があり、鎌倉末期のものとされている[8]。また日神仲善寺西方墓地には平家六代の君の伝承をもつ五輪塔や日神石仏群（17）がある。これらは、鎌倉時代末期の作であり、大洞石で作られている。そのほか太郎生瑞穂に国津神社十三重の塔（18）がある。以前、太郎生日神不動前の山王権現社境内にあったが、明治40年山王社合祀の際現在の国津神社に移されたものである。塔身四面にそれぞれ薬師・阿弥陀・釈迦・弥勒の四仏を配し、その整った形や屋根の力強い曲線などは鎌倉時代の特徴をあらわしているといわれ、国指定重要文化財である。ほかに不動院の種子碑、国津神社の種子碑と、いずれも鎌倉時代の石造物が多く、この時代は宗教的要

素を持つ遺跡・史跡が多く見られる⑨。

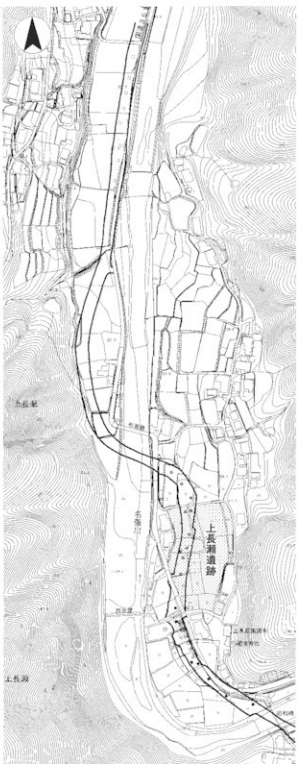
中世の末期には、天正５年（1577年）、神屋と奈垣にまたがる丘陵地に北畠具親第（北畠具親城）(19)が築かれる。北畠具教の弟である具親が北畠氏再興のために拠点とした城とされている。また具親を支援したとされる吉原氏が天仁元年（1108年）当地を支配したことに始まると伝えられる吉原氏城(20)が神屋に築かれる。ほか多くの中世城館が神屋、奈垣、布生に存在するが、織田軍の伊賀侵攻に備えるため、名張市域では70ヵ所前後の城館跡が確認されており、伊賀の周辺地域と比べると非常に分布密度が高くなっている地域でもある⑩。

近世に関して、伊勢神宮に関わる常夜燈が存在し、「太一」あるいは「太神宮」と刻まれている。上長瀬には「太一」と刻まれているものが多く、奈良方面には「太神宮」が多いことから、この時代はこの地が伊勢の影響を強く受けていることが伺える⑪。

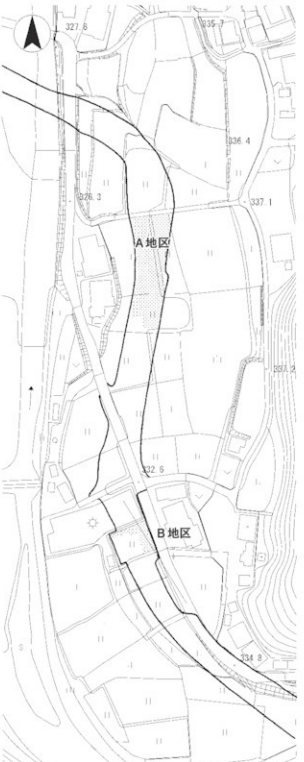
［註］

① 美杉村教育委員会『三重県一志郡美杉村遺跡分布地図』（1996年）
② 中貞夫『名張市史』名張地方史研究会（1974年）
③ 皇學館大学考古学研究会『美杉村の遺跡』（1995年）
④ 名張市『名張市史　資料編　考古』（2011年）
⑤ 『日本歴史地名大系第24巻　三重県の地名』平凡社（1983年）
⑥ 前掲註⑤に同じ
⑦ 前掲註③に同じ
⑧ 名張金石文研究会「名張市の金石文撰」（1984年）
⑨ 美杉村教育委員会『美杉の文化財』（1992年）
⑩ 前掲註④に同じ
⑪ 谷戸実「参宮常夜燈について」『名張の金石文撰　道標・顕彰碑・記念碑・文学碑編』名張金石文研究会（1987年）

第１図　遺跡位置図（１：50,000）〔国土地理院「阿保」「倶留尊山」１：25,000より作成〕



第２図　遺跡地形図（１：5,000）



第３図　調査区位置図（１：2,000）

□平成21年度範囲確認調査坑
□平成23年度範囲確認調査坑
■平成24年度範囲確認調査坑

Ⅲ　層位と遺構

1　基本層位

調査区は名張川右岸段丘上に位置する。標高は、A地区B地区ともに約330mである。土層断面図は、A地区は北壁、東壁、南壁の3面を、B地区は北壁の1面を図示した。

A地区　遺構検出の基本となる層は黄褐色土である。名張川右岸であるため、東の山側から西の川側にかけて、緩やかに標高が下がっている。調査区北端部において、調査区東側より約7m・19mの地点で段差があり、現況では段差のついた水田になっているが、水田作成時に地山が少なからず削平されたと思われる。その上に褐色土の包含層が有り、地山が低くなっているところでは、約40cmと厚く、段差がある上場では、約7cmと薄い。この上に、床土及び耕作土となっている。

B地区

遺構検出の基本となる層は明黄褐色土である。現況道路から西に約17mで川に向かう落ちがみられる。地山の上には、約50cmの褐色砂質土の包含層があり、そのうえに床土・耕作土となる。A地区に比べ、遺構密度は極端に薄く、出土した遺物もわずかである。

2　遺構

A地区　調査の結果、掘立柱建物3棟と土坑41基、溝4条、多数の小穴が確認できた。遺構は調査区の3か所に分かれて集中しており、いずれも掘立柱建物が検出された場所を中心としている。

SB46とSB48の間は、約15mであり、この間では、遺構密集地周辺に比べて極端に遺構が少ないため、空閑地となっていたと考えられる。3つの掘立柱建物は、棟方向は違うものの、軸方向が同じであり、またほぼ南北に沿っている。同時期、あるいは非常に近い時期の遺物が出土しているため、一連の建物であった可能性も考えられる。またその他の遺構についても、出土した遺物から12世紀後半から13世紀前半が主体であると考えられる。

掘立柱建物

SB46（第6図）　調査区北側の土坑が集中する付近で検出した桁行3間×梁行3間の総柱建物である。棟方向は南北棟で、軸方向はN11°W、柱間寸法は桁間が2.1m・1.8m・2.1m、梁間は2.1m・2.1m・2.4mである。柱穴からは小片ではあるが瓦器椀が出土している。SK14はこの建物内土坑である可能性が高い。

SB47（第7図）　調査区東側の1段高くなるところで検出した桁行3間×梁行4間の総柱建物である。棟方向は南北棟で、軸方向はN11°W、柱間寸法は2.1m・2.1m・1.8m、梁間は2.1mの等間隔である。柱穴からは12世紀後半の瓦器椀が出土した。西端の柱穴が、全体的に浅く、後世に削平されたと考えられる。f6pit1には根石がみられた。

SB48（第8図）　調査区中央部で検出した建物である。桁行2間×梁行4間で、東西の側に柱がもう一点備わっている。棟方向は東西棟で、軸方向はN11°W、柱間寸法は梁行2.1m・2.1m・2.1m・1.8mである。柱穴からは12世紀後半から13世紀初頭の瓦器椀が出土している。

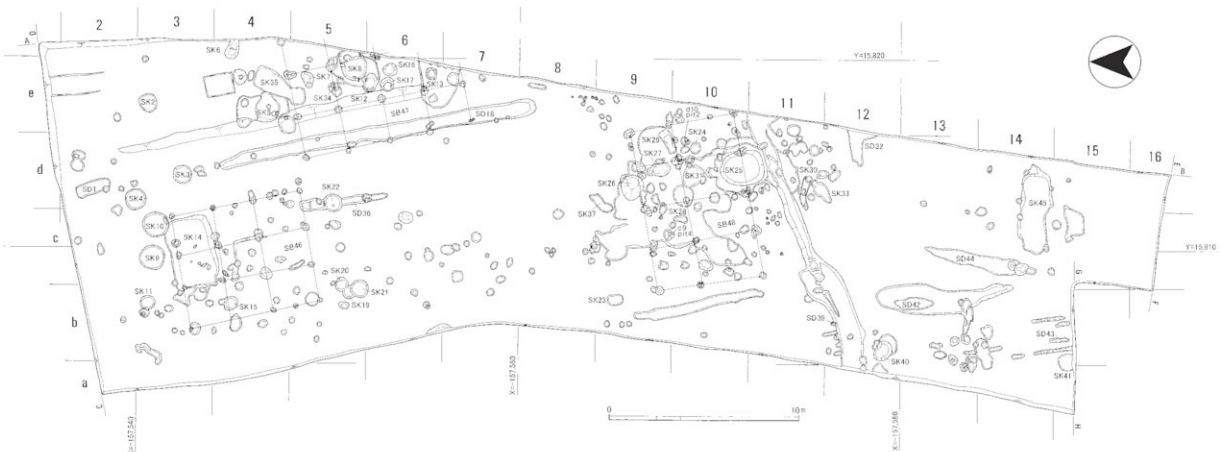
土坑

41基を検出したが、長方形の大型で浅いもの、円形のもの、不定形のもの、集石を伴うものとさまざまである。長方形の大型のものは、掘立柱建物に伴う建物内土坑であると考えられ、また円形土坑も建物の周辺にあるため、建物に関連したごみ穴であると考えられる。円形土坑のほとんどは、その掘形が底面よりほぼ直角に屈曲して立ち上がる様相がみられる。

SK2　e3グリッドで検出した直径1m、深さ約28cmの円形の土坑である。瓦器と土師器が出土したが、小片のため時期の特定は難しい。

SK3　d3グリッドで検出した直径1m、深さ約27cmの円形の土坑である。13世紀前半の瓦器椀が出土した。

SK4　d3グリッドで検出した直径1.1m、深さ約16cmの円形の土坑である。瓦器と土師器が出土



A地区（北壁）
1 明黄褐色土（10Y R7/6）（工事用道路盛土）
2 褐灰色土（10Y R4/1）（耕作土）
3 褐灰色土礫混（10Y R5/1）（畦畔）
4 にぶい黄褐色土（10Y R5/3）（耕作土）
5 明黄褐色粘質土（10Y R6/8）（床土）
6 橙色粘質土（7.5Y R6/6）（床土）
7 褐色砂質土（10Y R4/4）
8 黄褐色粘質土（10Y R5/6）（地山）
A地区（東壁）
1 灰白色土礫混（10Y R8/2）（盛土）
2 褐灰色土（10Y R4/1）（耕作土）
3 橙色粘質土（7.5Y R6/6）（床土）
4 褐灰色土（10Y R4/1）（耕作土）
5 褐色砂質土（10Y4/4）
6 橙色粘質土（10Y R6/6）（床土）
7 黄褐色粘質土（10Y R5/6）
8 黒褐色土（10Y R2/2）（ＳＫ６・ＳＫ８・ＳＫ13埋土）
9 灰黄褐色土（10Y R5/2）（旧耕作土）
10 橙色粘質土（4.5Y R4/2）（床土）
11 灰黄褐色土（10Y R4/2）
12 にぶい黄色粘質土（10Y R4/3）
13 （ＳＤ32埋土）
14 黄褐色粘質土（10Y R5/6）（地山）
A地区（南壁）
1 褐灰色土（10Y R4/1）（耕作土）
2 橙色粘質土（7.5Y R6/6）（床土）
3 灰黄褐色土（10Y R4/2）（旧耕作土）
4 褐灰色土（10Y R5/1）
5 灰黄褐色土（10Y R4/2）
6 にぶい黄褐色粘質土（10Y R4/3）
7 灰黄褐色砂質土（10Y R5/2）
8 にぶい黄褐色砂質土（10Y R5/4）（盛土）
9 にぶい黄褐色砂質土（10Y R4/3）（旧耕作土）
10 褐色粘質土（10Y R4/6）（床土）
11 にぶい黄褐色粘質土（10Y R4/3）
12 灰黄褐色砂質土（10Y R4/2）
13 黒褐色土（10Y R4/2）（SK41埋土）
14 黄褐色粘質土（10Y R5/6）（地山）

したが、小片のため時期の特定は難しい。

ＳＫ５　ｅ４グリッドで検出した長辺2.7m、短辺1.4mのやや長方形に近い土坑である。その中央部は約21cmと土坑縁辺部に比べ深くなっている。12世紀後半から13世紀前半の瓦器が出土した。

ＳＫ６　ｆ４グリッドで検出した長径約１m、短径0.7mの楕円形の土坑である。西半部の深さは約44cmとやや深い。13世紀後半から14世紀初頭の南伊勢の土師器鍋が出土した。

ＳＫ７　ｅ５グリッドで検出した長径0.9m、短径0.6m、深さ約10cmの楕円形の土坑である。12世紀後半の瓦器皿が出土した。

ＳＫ８　ｅ５・６グリッドで検出した長径2.9mの土坑である。土坑の縁辺部では浅く、中央部で約36cmと深さが最大になっている。調査区内では比較的多量の土器が出土しており、12世紀後半から13世紀前半の瓦器椀、渥美産陶器練鉢、13世紀前半の南伊勢系土師器鍋、ほかに温石、鉄釘も出土している。

ＳＫ９　ｃ３グリッドで検出した直径1.3m、深さ約28cmの円形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ10　ｃ３グリッドで検出した直径1.3m、深さ約28cmの円形の土坑である。13世紀前半の土師器鍋が出土した。

ＳＫ11　ｂ３グリッドで検出した直径0.8m、深さ約12cmの円形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ12　ｅ６グリッドで検出した長径0.9m、短径0.7m、深さ約15cmの楕円形の土坑である。13世紀前半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ13　ｅ６グリッドで検出した長径2.4m以上、短径２mの大型の土坑である。しかし調査区外へと広がるため、規模の特定はできない。深さが約７cmと浅いことと、ＳＢ47内の南部に位置していることから、建物内土坑の可能性も考えられる。上部が水平になった直径0.4mの根石とみられる石をもつ小穴が土坑内に検出された。12世紀後半の瓦器椀が出土した。ほかに渥美産の練鉢が出土した。

ＳＫ14（第６図）　ｃ３グリッドで検出した長辺3.9m、短辺2.2m、深さ約20cmの長方形の土坑である。掘形は底面から緩やかに立ち上がっている。ＳＢ46内の北西部に位置しているが、建物内土坑と考えられる。鎌倉時代の南伊勢系土師器鍋と12世紀後半の瓦器椀、また小片ではあるが青磁椀が出土した。また鉄釘が出土している。なお、15世紀前半の土師器鍋が出土しているが、土坑上の包含層からと考えられる。

ＳＫ15　ｂ４グリッドで検出した直径0.7m、深さ約21cmの円形の土坑である。瓦器椀と土師器が出土したが、いずれも小片のため、時期の特定は難しい。

ＳＫ16　ｅ６グリッドで検出した長径１m、短径0.7m、深さ約15cmの楕円形の土坑である。西半部が深く、東半部はテラス状に浅くなっている。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ17　ｅ６グリッドで検出した直径0.7m、深さ約18cmの円形の土坑である。他の柱穴との関連はわからないが、直径0.4mの円形の石が出土した。ＳＫ13内の小穴と同じく上部平面が水平になっているため、柱穴の根石であると考えられる。12世紀後半の瓦器が出土した。

ＳＫ19　ｂ５グリッドで検出した直径0.8m、深さ約14cmの円形の土坑である。ＳＫ20、ＳＫ21より新しい。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ20　ｃ５グリッドで検出した直径0.7m、深さ約15cmの円形の土坑である。ＳＫ19より古い。12世紀後半の瓦器皿が出土した。

ＳＫ21　ｃ５グリッドで検出した直径１m、深さ約36cmの円形の土坑である。ＳＫ19より古い。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ22　ｄ５グリッドで検出した直径１m、深さ約16cmの円形の土坑である。ＳＤ36より新しい。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ23　ｂ９グリッドで検出した長径0.9m、短径0.6m、深さ約15cmの楕円形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ24　ｄ10グリッドで検出した長径0.6m、短径0.5m、深さ約14cmの楕円形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ25（第８図）　ｄ10グリッドで検出した長軸2.8m、短辺2.6m、深さ約20cmの土坑である。検

出面では確認できなかったが、底部から考えると、ＳＢ48と南北の軸を同じくした長方形と推測することができるため、建物内土坑の可能性もある。土坑には長径で30㎝程の石が多くみられ、なかには被熱した石も出土している。12世紀後半の瓦器椀・皿が出土した。ほかに大和型土師器釜が出土した。

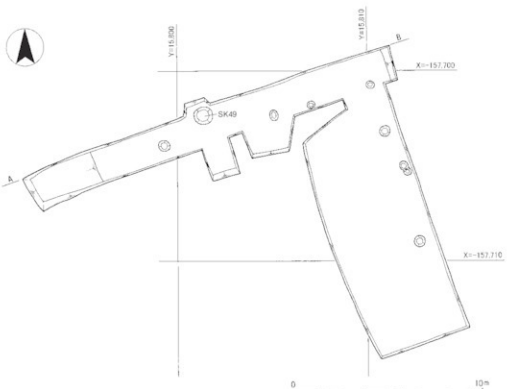
ＳＫ26（第９図）　ｄ９グリッドで検出した長径1.3m、短径1.2m、深さ約65㎝のほぼ円形の土坑である。調査区内では最も深い遺構となる。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ27　ｄ９グリッドで検出した長径1.2m、短径0.9m、深さ約11㎝の卵形の土坑である。12世紀後半の瓦器が出土した。

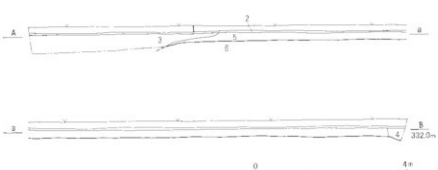
ＳＫ28　ｄ10グリッドで検出した直径1.1m、深さ約13㎝の円形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ29　ｄ９グリッドで検出した長軸1.3m、短辺0.5m、深さ約16㎝の長方形に近い楕円形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ30　ｄ11グリッドで検出した長径約2.2m、深さ約11㎝の不整形の土坑である。13世紀前半の瓦器椀が出土した。

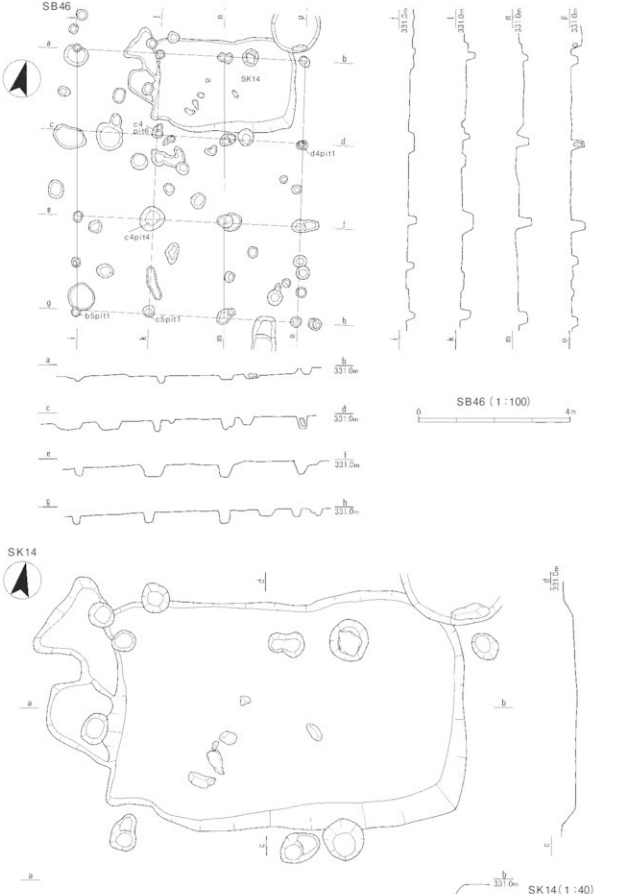


B地区（北壁）



B地区（北壁）
1　褐灰色土（10Y R4/1）（耕作土）
2　褐色粘質土（10Y R4/6）（床土）
3　暗褐色砂質土（10Y R3/3）（盛土）
4　褐色砂質土（10Y R4/6）（盛土）
5　褐色砂質土（10Y R4/4）
6　明黄褐砂質土（10Y R7/6）（地山）

第５図　Ｂ地区遺構平面図（１：200）土層断面図（１：100）



第6図　ＳＢ46実測図（１：100）　ＳＫ14実測図（１：40）

ＳＫ31　ｄ10グリッドで検出した長径1.3m、短径１m、深さ約14cmの楕円形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ33　ｄ12グリッドで検出した長径1.5m、深さ約12cmの不整形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ34　ｅ５グリッドで検出した長径0.8m、短径0.5m、深さ約34cmの楕円形の土坑である。掘形は中央部が極端に深くなっている。13世紀前半の瓦器椀が出土した。ほかに大和型土師器羽釜が出土した。

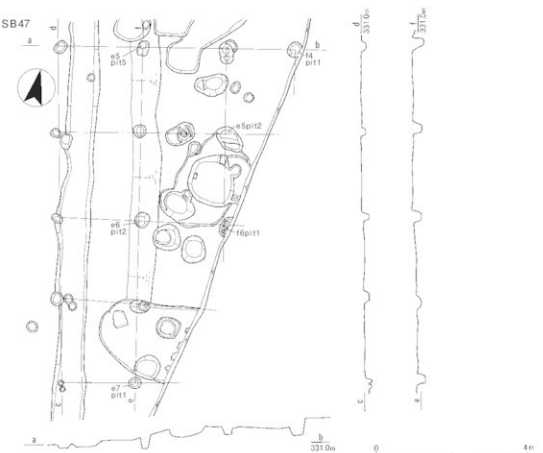
ＳＫ35　ｅ４グリッドで検出した長軸３m、深さ約５cmの不整形の土坑である。12世紀後半以降とみられる瓦器皿が出土した。

ＳＫ37　ｄ９グリッドで検出した長軸1.4m、深さ約６cmの不整形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

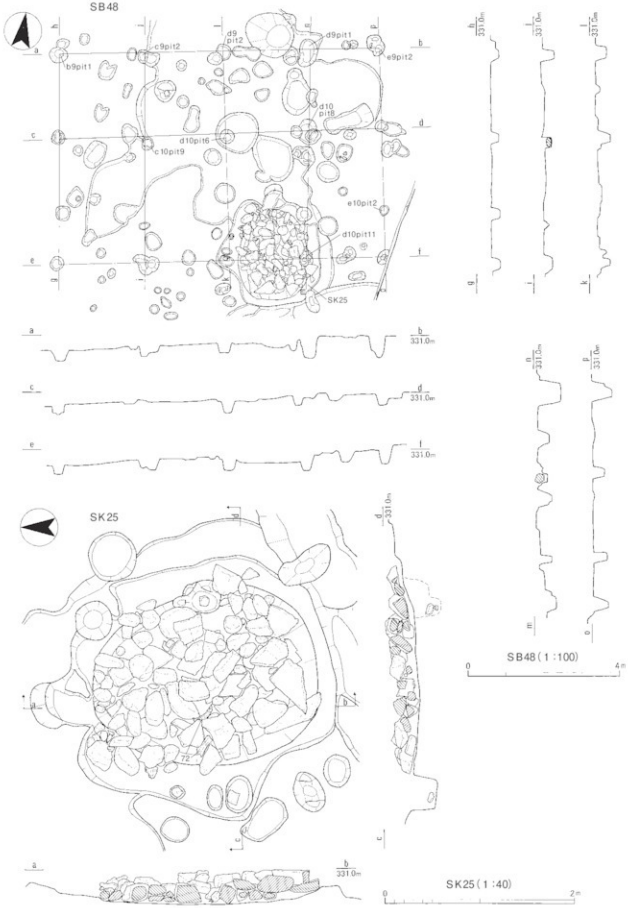
ＳＫ40　ｂ12グリッドで検出した長径1.1m、短径0.9m、深さ約31cmの楕円形の土坑である。12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＫ41　ｂ15グリッドで検出したほぼ円形の土坑である。直径は約0.9mとみることができるが、調査区外へと続くため、確認できない。深さは約11cmである。12世紀後半から13世紀前半の瓦器が小片であるが出土した。

ＳＫ45（第９図）　ｄ14グリッドで検出した長辺4.8m、短辺1.5m、深さ約24cmのやや長方形に近い土坑である。しかし、平面からは確認できなかったが、土層断面から判断して、２つの土坑が合わさっている可能性がある。その場合西半部が東半部より新しい。また、土坑の北東部には焼土が多量にみられた。ただ、遺構壁面に被熱の痕はないため焼土坑とは考えにくく、おそらく焼土を埋めたと思われる。遺物はほとんどなく、わずかに瓦器片が出土したが、小片のため時期は特定できない。



第７図　ＳＢ47実測図（1：100）



第８図　ＳＢ48実測図（１：100）　ＳＫ25実測図（１：40）

溝

５条を検出したが、ＳＤ38・39・43については耕作溝とみられる。ＳＤ１・18、また遺構番号はついていないがＳＢ48の西に位置する南北にのびる溝は、区画溝と考えられる。検出された溝は、全般的に浅いものがほとんどである。

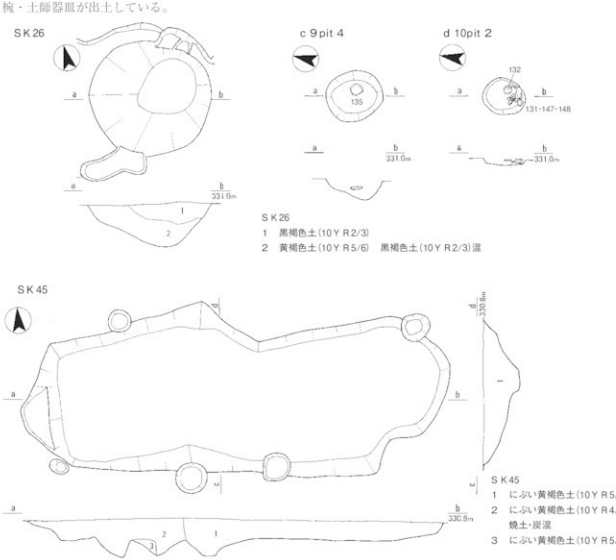
ＳＤ１　ｄ２グリッドで検出した長さ1.8m、幅0.7m、深さ約６㎝の溝である。位置と方向を考えると、ＳＤ18とつながる一体のものである可能性がある。瓦器皿が小片であるが出土している。

ＳＤ18　ｄ４～ｅ８グリッドで検出した長さ17m、幅0.9m、深さ約11㎝の直線の溝である。ＳＢ47の柱穴より古く、棟方向に沿っているため、ＳＢ46周辺とＳＢ47周辺の遺構密集地を区画するものと考えられる。12世紀後半から13世紀前半の瓦器椀・土師器皿が出土している。

ＳＤ32　ｄ12グリッドで検出した深さ約７㎝の不整形の溝としたが、調査区外へと続いていることもあり、その性格は不明である。瓦器と土師器が出土しているが、小片であるため時期の特定は難しい。

ＳＤ36　ｅ５グリッドで検出した長さ4.6m、幅0.4m、深さ約７㎝の直線の溝である。ＳＢ46の棟方向と溝が伸びる方向が同じであり、溝の北端がＳＢ46にかかっているため、関係する可能性はあるが、建物内の土坑とは離れているため、その関連性はわからない。瓦器が出土しているが、小片であるため時期の特定は難しい。ＳＫ22よりは古い。

ＳＤ44　ｃ13グリッドで検出した長さ６m、幅0.8m、深さ約８㎝の直線の溝である。13世紀前半の瓦器が出土した。



第９図　ＳＫ26・ＳＫ45・ｃ９pit ４・ｄ10pit ２実測図（１：40）

通番遺構名	グリット	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模(東西間・m×南北間・m)	主軸	方位(N基準)	備　考
SB46	b5	pit1	瓦器椀4期	12e後半	3(6.0)×3(7.0)	南北	N11°W	
	c4	pit4	瓦器椀4期					
	c4	pit6	瓦器椀5期					
	c5	pit1	瓦器					
	d4	pit1	瓦器椀					
SB47	e5	pit2	瓦器椀5期	12e後半	3?(6.3)×4(9.0)	南北	N11°W	f6pit1に根石有。
	e5	pit5	瓦器椀5期					
	e6	pit2	瓦器椀5期					
	e7	pit1	土師器					
	f4	pit1	瓦器皿・土師器皿					
	f6	pit1	瓦器・土師器					
SB48	b9	pit1	瓦器椀6期	13e前半	2・3(5.6)×4(8.7)	東西	N11°W	
	c9	pit2	瓦器椀6期・土師器					
	c10	pit9						
	d9	pit1	瓦器椀4期・5期					
	d9	pit2	瓦器椀5期					
	d10	pit6	瓦器椀6期					
	d10	pit8	瓦器椀5期					
	d10	pit11	瓦器椀5期・6期					
	e9	pit2	瓦器椀4期					
	e10	pit2						

第1表　遺構一覧表①

Pit

c9グリッドpit4（第9図）　長径60cm、短径54cm、深さ約20cmの楕円形のpitである。鎌倉時代の土師器皿が出土した。

d10グリッドpit2（第9図）　長径44cm、短径40cm、深さ約8cmの楕円形のpitである。土師器や瓦器が重なるように出土した。

B地区　調査の結果、土坑1基と小穴が少数確認できたが、遺構密度は薄く、小穴からは遺物の出土がみられなかった。出土した土器はいずれも小片のため、遺構の時期を特定するのは難しい。

SK49　直径1m深さ24cmの円形の土坑である。土師器が出土したが、小片のため、時期の特定は難しい。

遺構番号	性格	時期	地区	グリッド	備考
ＳＤ１	溝	鎌倉時代	A	ｄ２	
ＳＫ２	土坑	鎌倉時代	A	ｅ３	
ＳＫ３	土坑	13世紀前半	A	ｄ３	
ＳＫ４	土坑	鎌倉時代	A	ｄ３	
ＳＫ５	土坑	13世紀前半	A	ｅ４	
ＳＫ６	土坑	13世紀後半～14世紀初頭	A	ｆ４	
ＳＫ７	土坑	12世紀後半	A	ｅ５	
ＳＫ８	土坑	13世紀前半	A	ｅ５・６	
ＳＫ９	土坑	12世紀後半	A	ｃ３	
ＳＫ10	土坑	13世紀前半	A	ｃ３	
ＳＫ11	土坑	12世紀後半	A	ｂ３	
ＳＫ12	土坑	13世紀前半	A	ｅ６	
ＳＫ13	土坑	13世紀前半	A	ｅ６	根石をもつ小穴
ＳＫ14	土坑	12世紀後半	A	ｃ３	
ＳＫ15	土坑	鎌倉時代	A	ｂ４	
ＳＫ16	土坑	13世紀前半	A	ｅ６	
ＳＫ17	土坑	12世紀後半	A	ｅ６	根石
ＳＤ18	溝	13世紀前半	A	ｄ４－６・ｅ６－８	ＳＫ20・ＳＫ21を切る。
ＳＫ19	土坑	12世紀後半	A	ｂ５	ＳＫ19に切られる。
ＳＫ20	土坑	12世紀後半	A	ｃ５	ＳＫ19に切られる。
ＳＫ21	土坑	12世紀後半	A	ｃ５	
ＳＫ22	土坑	12世紀後半	A	ｄ５	ＳＤ36を切る。
ＳＫ23	土坑	12世紀後半	A	ｂ９	
ＳＫ24	土坑	13世紀前半	A	ｄ10	
ＳＫ25	土坑	12世紀後半～13世紀前半	A	ｄ10	集石
ＳＫ26	土坑	12世紀後半	A	ｄ９	
ＳＫ27	土坑	12世紀後半	A	ｄ９	
ＳＫ28	土坑	12世紀後半	A	ｄ10	
ＳＫ29	土坑	12世紀後半	A	ｄ９	
ＳＫ30	土坑	13世紀前半	A	ｄ11	
ＳＫ31	土坑	12世紀後半	A	ｄ10	
ＳＤ32	溝	鎌倉時代	A	ｄ12	
ＳＫ33	土坑	12世紀後半	A	ｄ12	
ＳＫ34	土坑	13世紀前半	A	ｅ５	
ＳＫ35	土坑	鎌倉時代	A	ｅ４	
ＳＤ36	溝	12世紀後半	A	ｅ５	ＳＫ22に切られる。
ＳＫ37	土坑	12世紀後半	A	ｄ９	
ＳＤ38	溝	—	A	ｂ12	耕作溝
ＳＤ39	溝	—	A	ｂ12	耕作溝
ＳＫ40	土坑	12世紀後半	A	ｂ12	
ＳＫ41	土坑	12世紀後半～13世紀前半	A	ｂ15	
ＳＤ42	溝	—	A	ｂ13	
ＳＤ43	溝	—	A	ｂ15	耕作溝
ＳＤ44	溝	13世紀前半	A	ｃ13	
ＳＫ45	土坑	鎌倉時代	A	ｄ14	焼土含む
ＳＫ49	土坑	—	B	—	

第２表　遺構一覧表②

Ⅳ 遺　　物

1　概要

今回の調査で出土した遺物は、そのほとんどが鎌倉時代のもので、12世紀後半～13世紀前半の瓦器が大半を占める。また、実測できた出土遺物はすべてA地区からのもので、B地区において出土したものは、中世の土器であるものの、小片のためその詳細はわからない。なお、大和型羽釜については菅原正明氏の編年[1]、瓦器については福田典明氏の編年[2]、中北勢及び南伊勢系土師器については伊藤裕偉氏の編年[3][4]、山茶椀については藤澤良祐氏の編年[5]により記述する。

2　出土遺物

溝ＳＤ１出土遺物（１）　１は瓦器皿で、内面底部に粗い平行線状の暗文がみられる。

土坑ＳＫ５出土遺物（２～７）　２は土師器で、「く」の字に外反する口縁部と口縁端部を内側に折り返さず、まるくおさめる形態から大和型羽釜Ｂ１型に相当し、12世紀後半から13世紀前半と考えられる。３～７は瓦器椀で、３は内面ミガキが口縁部にまで施されており、４は内面底部に複数の輪をもち一周する連結輪状文の暗文がみられる。５期に相当し、12世紀後半と考えられる。５は内面ミガキが口縁端部よりやや下ったところから施され、６は内面底部の暗文はラセン状であり、６期に相当し13世紀前半と考えられる。７は、土器表面の風化があり、調整方法を確認することは困難である。

土坑ＳＫ７出土遺物（８）　８は瓦器皿で、内面底部にジグザグ状の暗文がみられる。

土坑ＳＫ８出土遺物（９～48）　９～23は土師器皿で、９～22が口径８～９cmの小型のもの、23は口径14cmの大型のものである。小型のものには内彎して立ち上がる口縁部をもつもの（９～17）と底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつもの（18～22）がある。大和を中心とした畿内一円にみられるもので、県内では中勢地域に分布しており、12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられている。24は台付皿の高台部である。25･26は南伊勢系土師器鍋の口縁部で、南伊勢Ⅱａ期に相当し13世紀前半と考えられる。27は口縁部が内側に折り返さず、まるくおさめる形態から、28は口縁部が外反する形態から、いずれも大和型羽釜Ｂ１型に相当し、12世紀後半から13世紀前半と考えられる。29～44は瓦器椀である。29～31は内面ミガキが口縁部付近まで施されており、29･30の内面底部暗文の形態から５期と判断でき、12世紀後半と考えられる。32～44は口縁部をやや下ったところからミガキが施されていることから、６期に相当し、13世紀前半と考えられる。なお、31･40の炭素の吸着はほとんどみられない。45は瓦器皿で、内面底部にジグザグ状の暗文がみられる。内面の炭素の吸着は極めて少ない。46は陶器練鉢で、藤澤氏によると渥美産片口鉢である[6]。12世紀後半と考えられる。47は温石で、滑石製石鍋を転用したもの。石鍋の鍔部分は削り取られ、中央部に穿孔されている。48は鉄製品で釘である。

土坑ＳＫ10出土遺物（49･50）　49は瓦器椀で、内面ミガキが口縁部まで施されている。５期に相当し12世紀後半と考えられる。50は南伊勢系土師器鍋である。内側に折り返された口縁部の形状から、南伊勢Ⅱａ期で13世紀前半と考えられる。

土坑ＳＫ13出土遺物（51～60）　51･52は南伊勢系土師器鍋で、51･52は南伊勢Ⅱａ期に相当し、13世紀前半と考えられる。53･54は口縁端部を内側に折り返さず、まるくおさめる形態から大和型羽釜の口縁部とみられ、Ｂ１型に相当し、12世紀後半から13世紀前半と考えられる。55から59は瓦器椀で、59は内面ミガキが口縁部まで施されており、５期に相当し12世紀後半、56は内面底部暗文が「ℓ」字を繰り返した形状で、57･58は内面ミガキが口縁部よりやや下からみられるため、６期に相当し13世紀前半と考えられる。60は陶器鉢で、渥美産片口鉢である。46に比べると高台貼付部が広がっているが、同時期のもので12世紀後半と考えられる。

土坑ＳＫ16出土遺物（61～63）　61･62は土師器皿で内彎して立ち上がる口縁部をもつ。近畿、大和を中心にみられるもので、12世紀後半から13世紀初頭

のものと考えられる。63は瓦器椀で、口縁部よりやや下からミガキが施され、内面底部暗文はラセン状であるため、６期に相当し、13世紀前半と考えられる。

溝ＳＤ18出土遺物（64 ～ 66） 64は土師器皿で、近畿、大和を中心にみられるもので、12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる。65･66は瓦器椀で、65は口縁部までミガキが施されており、５期に相当し12世紀後半、66は口縁部より下からミガキが施されており、６期に相当し13世紀前半と考えられる。

土坑ＳＫ20出土遺物（67） 67は瓦器皿で内面底部にジグザグ状の暗文が施されている。

土坑ＳＫ24出土遺物（68・69） 68は南伊勢系土師器鍋で、南伊勢Ⅱａ期に併行し13世紀前半。69は瓦器椀で、６期に相当し13世紀前半と考えられる。

土坑ＳＫ25出土遺物（70 ～ 83） 70は土師器皿で、近畿、大和を中心にみられるもので、12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる。71・72は大和型羽釜Ｂ１型に相当し、12世紀後半から13世紀前半と考えられる。73から79は瓦器椀で、73は外面にミガキがみられるため４期、74から78は５期に相当し、いずれも12世紀後半と考えられる。なお、73・75・79については外面に炭素の吸着はみられない。80から83は瓦器皿で、いずれも内面底部にジグザグの形状をした暗文がみられる。

土坑ＳＫ26出土遺物（84・85） 84・85は瓦器椀で、84は外面にミガキがみられる。84は４期、85は５期に相当し、12世紀後半と考えられる。

土坑ＳＫ27出土遺物（86・87） 86は土師器皿で、近畿、大和を中心にみられるもので、12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる。87は瓦器椀で４期に相当し、12世紀後半と考えられる。

土坑ＳＫ29出土遺物（88・89） 88は瓦器椀、89は瓦器小椀でいずれも５期に相当し、12世紀後半と考えられる。

土坑ＳＫ30出土遺物（90） 90は瓦器椀で、５期に相当し、12世紀後半と考えられる。

土坑ＳＫ31出土遺物（91） 91は瓦器椀で、４期に相当し、12世紀後半と考えられる。

土坑ＳＫ34出土遺物（92 ～ 94） 92は土師器羽釜で、大和型羽釜Ｂ１型に相当し、12世紀後半から13世紀前半と考えられる。93は瓦器椀で５期に相当し、12世紀後半と考えられ、94は瓦器皿で内面底部にジグザグ状の暗文が施されたものである。

土坑ＳＫ35出土遺物（95） 95は瓦器皿で内面底部にジグザグ状の粗い暗文が施されている。

土坑ＳＤ38出土遺物（96） 96は瓦器椀である。内面が不明瞭で、ミガキがはっきりとは確認できない。

土坑ＳＢ46出土遺物（97） 97は土師器皿で、県内中勢地域を中心に分布する12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる。

土坑ＳＢ47出土遺物（98・99） 98は土師器皿で、近畿、大和を中心に分布する12世紀後半から13世紀初頭のもの、99は瓦器皿で、暗文が粗く輪状にみられる。

土坑ＳＢ48出土遺物（100 ～ 121） 100・101は土師器皿で、県内中勢地域を中心に分布する12世紀後半から13世紀初頭のもの。102は南伊勢系土師器鍋で、南伊勢Ⅱａ期に相当し、13世紀前半。103は大和型羽釜の口縁部とみられ、12世紀後半から13世紀前半と考えられる。104から118は瓦器椀で、104から106は４期、107から110は５期に相当し12世紀後半、111から115は６期に相当し13世紀前半と考えられる。117は内面底部暗文が連結輪状に数周している。４期に相当するであろうか。なお、108・116は外面に炭素の吸着はみられない。119は小椀である。口縁部までミガキが施されている。120・121は瓦器皿である。

土坑ＳＫ６出土遺物（122） 122は土師器鍋で、南伊勢Ⅱｂ期に相当し、13世紀後半から14世紀初頭のものである。

土坑ＳＫ14出土遺物（123 ～ 126） 123・124は土師器鍋で、123は南伊勢Ⅱａ期に相当し、13世紀前半。124は器壁が薄く、南伊勢Ⅲｂ期に相当し、15世紀前半のものである。ＳＫ14からの出土としているが、その直上の包含層からの出土と考えられる。125は瓦器皿。外面に炭素の吸着は極めて少ない。126は鉄製品で釘である。

ピット出土遺物（127 ～ 152） 127は砥石で、表裏２面に磨り面をもつ。128から135は土師器皿で、近畿、大和を中心にみられるもので、12世紀後半から13世紀初頭のもの、135は口径14㎝の大皿で口縁外面

が強く２段ナデで調整されている。13世紀前半と考えられる。136から151は瓦器椀である。136から140は４期、141は５期に相当し12世紀後半、142から151は６期に相当し13世紀前半と考えられる。152は瓦器皿である。

遺構外出土遺物（153 ～ 204） 153から155は土師器皿で、153・154は近畿、大和を中心にみられるもので、12世紀後半から13世紀初頭のもの、155は口径14.9㎝の大皿で、13世紀前半と考えられる。156から166は土師器羽釜である。156は、口縁部がヨコナデで四角く整えられており、鍔部が短い。また内面はハケで調整されている。大和Ｈ型に相当するであろうか。157は口縁部が内湾しており大和Ｈ型、158から166は大和Ｂ１型である。167は陶器（山茶椀）で渥美産５型式[7]で12世紀後半から13世紀前半と考えられる。168は藤澤氏によると、古瀬戸平椀である。古瀬戸後Ⅰ期で14世紀後半になる[8]。169は土師質の土鍾である。170から202は瓦器椀である。170から184は４期、185から190は５期に相当し12世紀後半、191～202は６期に相当し13世紀前半と考えられる。203・204は瓦器皿である。いずれも外面に炭素の吸着はほとんどなく、203は橙色を呈している。

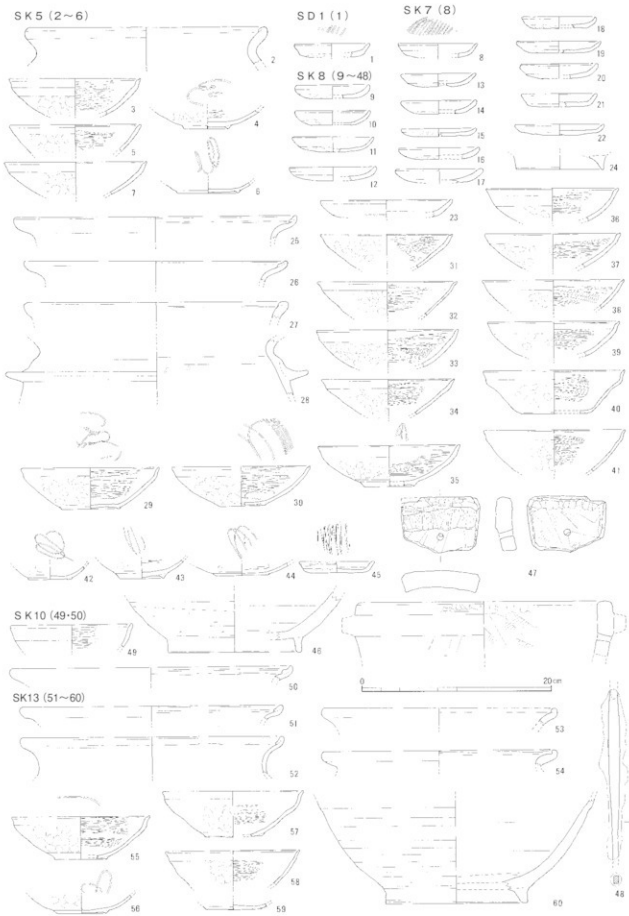
範囲確認坑出土遺物（205 ～ 223） 205から223は範囲確認坑No.５より出土した。なお、No.５はＳＫ25直上である。205から209は土師器皿で、大和を中心にみられるもので、12世紀後半から13世紀初頭である。208は底部が高く内湾している。209は口径14㎝の大皿である。210から220は瓦器椀で、210から217は５期に相当し12世紀後半、218から220は６期に相当し13世紀前半と考えられる。221から223は瓦器皿である。221・222は内面底部暗文が格子状に施されており、221は暗文が非常に密である。223の暗文は平行線状である。

[註]

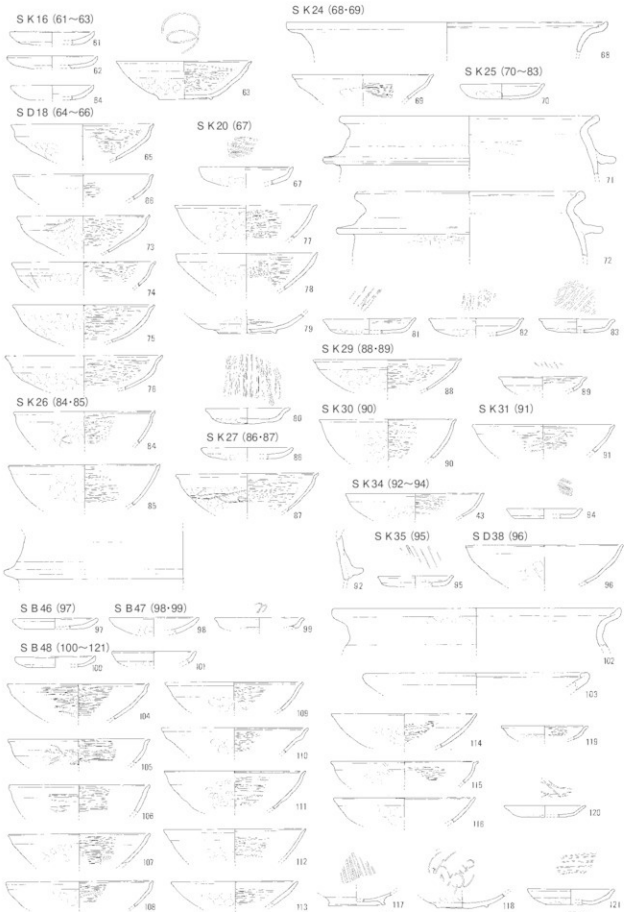
① 香原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢Ⅱ』国立奈良文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会（1988年）
② 福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」『第24回中世土器研究会瓦器椀生産の展開』日本中世土器研究会（2005年）
③ 伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史資料編　考古２』三重県（2008年）
④ 伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史資料編　考古２』三重県（2008年）
⑤ 藤澤良祐「総論」『愛知県史　別編　中世・近世瀬戸系窯業２』愛知県史編さん委員会（2007年）
⑥ 愛知県史編さん委員会『愛知県史　別編　中世・近世常滑系　窯業３』（2012年）
⑦ 前掲註⑥に同じ
⑧ 愛知県史編さん委員会『愛知県史　別編　中世・近世瀬戸系窯業２』（2007年）

[参考文献]

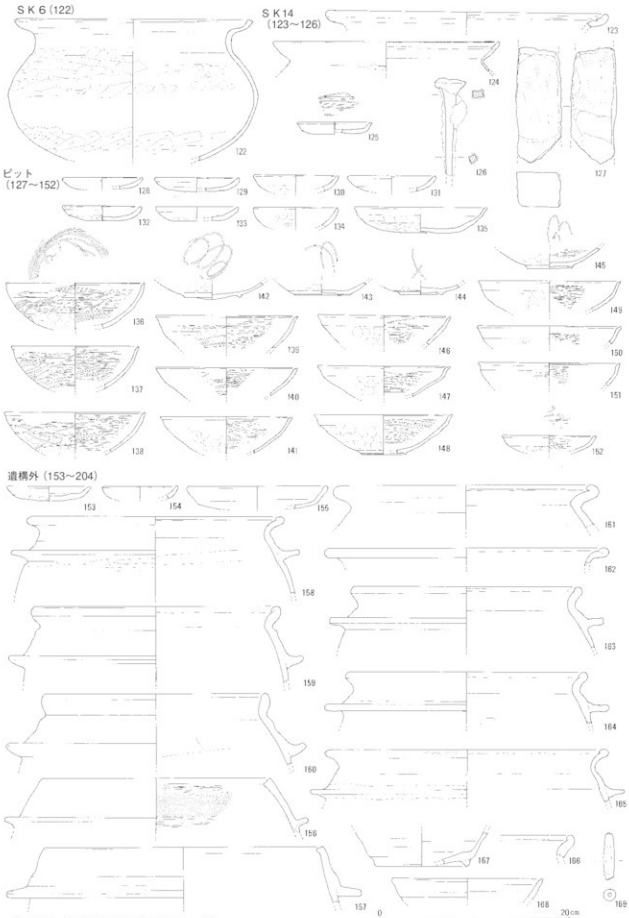
・伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫遺跡出土資料を中心に～」『島抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター（2000年）



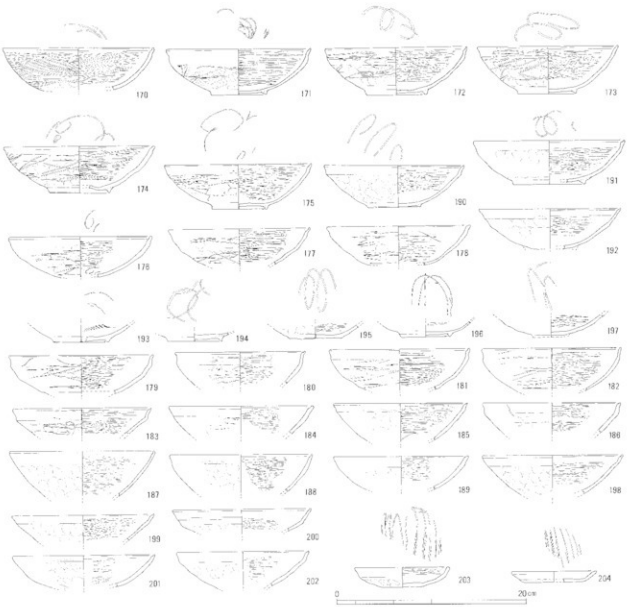
第10図　出土遺物実測図①（1：4）



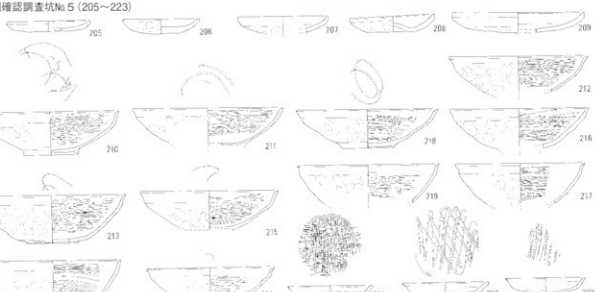
第11図　出土遺物実測図②（1：4）



第12図　出土遺物実測図③（１：４）



範囲確認調査坑No.5（205～223）



第13図　出土遺物実測図④（1：4）

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量（cm）口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
1	17-2	d-2	ＳＤ１	瓦器皿	8.0	—	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N5/)	密(雲母少含)	口縁部2/12	内面底部に暗文。
2	12-5	e-4	ＳＫ５	土師器羽釜	25.6	—	—	ヨコナデ	にぶい黄褐(7.5YR5/4)	密(２mmの砂粒含)	口縁部1/12	煤付着。大和型。
3	4-5	e-4	ＳＫ５	瓦器椀	13.8	—	—	外面ヤサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部1/12	
4	12-3	e-4	ＳＫ５	瓦器椀	—	—	高台径4.8	外面ヤサエ 内面ナデ、ミガキ	灰(N4/)	密	底部7/12	内面底部に暗文。
5	12-4	e-4	ＳＫ５	瓦器椀	14.0	—	—	外面ヤサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部2/12	
6	4-7	e-4	ＳＫ５	瓦器椀	—	—	高台径6.4	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	暗灰(N3/)	密	高台部4/12	内面底部に暗文。
7	4-6	e-4	ＳＫ５	瓦器椀	15.0	—	—	外面ヤサエ 内面ミガキ	オリーブ黒(7.5Y3/1)	密	口縁部2/12	
8	5-1	e-5	ＳＫ７	瓦器小皿	8.4	—	—	ヨコナデ	灰(N4/)	密	口縁部3/12	内面底部に暗文。
9	6-7	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.0	1.4	底径5.0	外面ヤサエ 内面ナデ	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	やや密(0.5mmの砂粒少含)	口縁部1/12 底部2/12	
10	33-3	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.0	1.6	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	外:灰黄(2.5Y7/2) 内:浅黄(2.5Y7/3)・淡黄(2.5Y8/3)	やや密(0.5mmの砂粒少含)	口縁部5/12	
11	33-1	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.6	1.6	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部4/12	
12	13-6	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	9.2	1.4	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	密(１mmの砂粒含)	口縁部3/12	外面底部に黒斑。
13	6-5	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.0	1.4	底径3.8	外面ヤサエ 内面ミガキ	外:にぶい黄橙(10YR6/4) 内:にぶい黄(2.5Y6/3)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部3/12 底部3/12	内面に炭化物。
14	6-6	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.0	1.4	底径3.8	外面ヤサエ	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや密	口縁部1/12 底部2/12	
15	6-8	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.0	0.8	底径5.0	ナデ、オサエ	にぶい黄橙(10YR6/4)	やや密(0.5mmの砂粒、雲母少含)	口縁部2/12 底部2/12	
16	6-4	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.6	1.2	底径4.6	外面ヤサエ 内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部2/12	
17	2-1	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	9.2	—	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	密(１mmの砂粒含)	口縁部2/12	
18	33-2	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.0	1.2	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	外:浅黄(2.5Y7/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部4/12	
19	6-3	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	9.0	1.2	底径5.0	外面ヤサエ 内面ナデ	外:にぶい黄橙(10YR6/4) 内:にぶい橙(7.5YR6/4)	やや密(0.5mmの砂粒、雲母少含)	口縁部2/12 底部2/12	
20	2-3	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	8.3	1.5	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	灰白(10YR8/2)	密(１mmの砂粒含)	口縁部4/12	歪み有。
21	2-2	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	9.0	1.4	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	密(１mmの砂粒含)	口縁部3/12	
22	2-4	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	9.4	1.2	—	外面ヤサエ、ナデ 内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	密(１mmの砂粒含、３mmの砂粒混)	口縁部1/12	
23	6-2	e-5	ＳＫ８	土師器小皿	14.0	—	—	ヨコナデ	外:橙(7.5YR7/6) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部1/12	
24	8-3	e-5	ＳＫ８	土師器台付皿	—	—	高台径9.2	ナデ	外:灰黄(2.5Y6/2)内:灰(5Y4/1)	やや密(0.5mmの砂粒、雲母極少含)	高台部4/12	
25	3-1	e-5	ＳＫ８	土師器鍋	30.0	—	—	ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	密(2mmの砂粒含)	小片	
26	3-3	e-5	ＳＫ８	土師器鍋	28.0	—	—	ヨコナデ	灰黄褐(10YR4/2)	密(2mmの砂粒含)	小片	煤付着。
27	8-4	e-5	ＳＫ８	土師器羽釜	28.0	—	—	ヨコナデ	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	やや密(1mmの砂粒、雲母少含)	口縁部1/12	大和型。
28	8-5	e-5	ＳＫ８	土師器羽釜	—	—	鍔径32.0	外面ケズリ 内面ナデ	外:にぶい黄(10YR6/3)、黒褐(10YR6/3) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)、灰黄褐(10YR5/2)	やや密(1mmの砂粒、雲母やや多含)	—	大和型。
29	7-2	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	14.6	4.3	高台径6.0	外面ナデ、オサエ 内面ナデ、ミガキ	外:灰(N4/) 内:灰(N5/) 浅黄(2.5Y7/4)混	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部2/12 高台部6/12	内面底部に暗文。
30	2-6	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	14.6	4.2	高台径4.7	外面ヤサエ、指圧痕 内面ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部2/12 高台部4/12	内面底部に暗文。
31	6-9	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	14.0	—	—	外面ヤサエ 内面ミガキ	外:灰白(5Y8/1)、灰白(10YR8/2) 内:浅黄(2.5Y7/4)	やや密(1mmの砂粒、金雲母少含)	口縁部2/12	
32	2-5	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	14.8	—	—	外面ヤサエ、指圧痕 内面ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部1/12	
33	34-1	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	15.0	—	—	外面ヤサエ 内面ミガキ	黒(7.5Y2/1)	やや密(0.5mmの砂粒少含)	口縁部6/12	
34	7-5	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	14.0	—	—	外面ヤサエ 内面ナデ、ミガキ	灰(N5/)	やや密(0.5mmの砂粒、雲母極少含)	口縁部2/12	
35	7-1	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	15.0	4.3	高台径5.2	外面ナデ、オサエ 内面ミガキ	外:灰(N4/) 内:灰(N5/)浅黄(2.5Y7/4)混	やや密(0.5mmの砂粒、雲母少含)	口縁部1/12 高台部3/12	内面底部に暗文。
36	7-4	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	14.0	—	—	外面ナデ、オサエ 内面ナデ、ミガキ	外:灰(N4/)、灰(7.5Y6/1) 内:灰(N5/)	やや密(0.5mmの砂粒少含)	口縁部2/12	

第３表　出土遺物観察表①

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量（cm）口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
37	7-6	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	14.4	—	—	外面オサエ 内面ナデ、ミガキ	外:暗灰(N3/)、灰(N5/) 内:灰(N4/)、灰白(5Y7/2)最	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部5/12	
38	7-3	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	15.0	—	—	外面ナデ、オサエ 内面ナデ、ミガキ	灰(N4/)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部4/12	
39	6-11	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	14.0	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	外:灰(N4/) 内:灰(N5/)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部2/12	
40	6-10	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	15.0	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:灰白(10YR8/2)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部1/12 高台部1/12	
41	2-7	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	15.0	—	—	外面オサエ、面仕上 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部1/12	
42	8-2	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	—	—	高台径5.2	外面オサエ 内面ナデ	外:灰(N4/) 内:灰(N5/)	やや密(0.5mmの砂粒少含)	高台部5/12	内面底部に暗文。
43	7-7	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	—	—	高台径4.6	外面ナデ、オサエ 内面ナデ、ミガキ	外:浅黄(2.5Y8/3) 内:灰(N4/)	やや密(１mmの砂粒少含)	高台部10/12	内面底部に暗文。
44	8-1	e-5	ＳＫ８	瓦器椀	—	—	高台径5.4	外面オサエ 内面ナデ、ミガキ	灰(N4/)	やや密(１mmの砂粒少含)	高台部4/12	内面底部に暗文。
45	6-1	e-5	ＳＫ８	瓦器小皿	8.0	1.2	底径5.0	外面オサエ	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部2/12 底部4/12	内面底部に暗文。
46	35-1	e-5	ＳＫ８	陶器鉢	—	—	高台径14.2	外面ロクロナデ、ロクロケズリ 内面ロクロナデ	外:灰(5Y6/1)-灰黄(2.5Y7/2) 内:灰白(5Y7/2)-灰白(5Y7/1)	やや密(１mmの砂粒やや多含)	高台部1/12	片口鉢。渥美産。内面擂れている。
47	38-2	e-5	ＳＫ８	滑石	長径8.3 短径5.8		厚さ2.3	削り取り	—	—	—	滑石。石鍋の転用。穿孔有。
48	1-1	e-5	ＳＫ８	鉄製品釘	長さ9.0	幅1.4	厚さ1.3	—	—	—	—	
49	12-1	c-3	ＳＫ10	瓦器椀	13.0	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部1/12	
50	12-2	c-3	ＳＫ10	土師器鍋	30.0	—	—		にぶい黄橙(10YR6/3)	密(2mmの砂粒含)	小片	
51	3-4	e-6	ＳＫ13	土師器鍋	28.0	—	—	ヨコナデ	外:浅黄(2.5Y7/3) 内:にぶい褐(7.5YR6/3)	密(2mmの砂粒含)	小片	煤付着。
52	3-2	e-6	ＳＫ13	土師器鍋	28.0	—	—	ヨコナデ	にぶい橙(10YR6/3)	密(2mmの砂粒含)	小片	
53	9-2	e-6	ＳＫ13	土師器羽釜	25.0	—	—	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR5/3)	やや密(金雲母含)	口縁部1/12	大和型。
54	3-5	e-6	ＳＫ13	土師器羽釜	25.0	—	—	ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	密(2mmの砂粒含)	小片	煤付着。大和型。
55	4-1	e-6	ＳＫ13	瓦器椀	14.6	4.5	高台径5.6	外面オサエ 内面ミガキ、ナデ	灰(N4/)	密	口縁部1/12 高台部3/12	内面底部に暗文。
56	4-3	e-6	ＳＫ13	瓦器椀	—	—	高台径5.3	ナデ	暗灰(N3/)	密	高台部4/12	内面底部に暗文。
57	9-1	e-6	ＳＫ13	瓦器椀	14.8	4.8	高台径4.8	外面ユビオサエ 内面ミガキ	外:暗灰(N3/) 内:灰(7.5Y4/1)	密	口縁部1/12 高台部1/12	
58	4-2	e-6	ＳＫ13	瓦器椀	14.2	—	—	外面オサエ 内面ミガキ、ナデ	灰(N4/)	密	口縁部1/12	
59	4-4	e-6	ＳＫ13	瓦器椀	—	—	高台径5.9	ナデ	灰(N4/)	密	高台部7/12	
60	35-2	e-6	ＳＫ13	陶器鉢	17.0	—	高台径15.2	外面ロクロナデ、ロクロミガキ 内面ロクロナデ	外:黒褐(10YR3/1)-灰黄褐(10YR4/2) 内:浅黄(2.5Y7/3)-灰白(5Y7/1)-黒褐(2.5Y3/1)	密(１mm砂粒極少含)	高台部2/12	片口鉢。渥美産。
61	5-5	e-6	ＳＫ16	土師器小皿	9.0	—	—	ヨコナデ、ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	密(微砂粒含)	口縁部1/12	
62	5-4	e-6	ＳＫ16	土師器小皿	9.6	—	—	ヨコナデ、ナデ	灰黄橙(10YR6/2)	密(微砂粒含)	口縁部2/12	
63	37-1	e-6	ＳＫ16	瓦器椀	14.2	4.0	高台径5.6	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	密	ほぼ完形	内面底部に暗文。
64	9-4	e-7	ＳＤ18	土師器小皿	8.8	1.5	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	やや密(１mmの砂粒少含)	口縁部2/12	
65	9-8	d-5	ＳＤ18	瓦器椀	15.0	—	—	外面ユビオサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	やや密(0.5mmの砂粒少含)	口縁部2/12	
66	9-3	d-5	ＳＤ18	瓦器椀	14.8	—	—	内面ミガキ	灰(N5/)	やや密(１mmの砂粒少含)	口縁部1/12	
67	10-6	e-5	ＳＫ20	瓦器皿	10.0	—	—	外面ユビオサエ、ナデ	灰(N6/1)	密	口縁部2/12	内面底部に暗文。
68	16-3	d-10	ＳＫ24	土師器鍋	34.0	—	—	ナデ	灰白(2.5Y8/2)	やや密(雲母少含)	口縁部1/12	
69	17-3	d-10	ＳＫ24	瓦器椀	15.0	—	—	外面工具ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	密(細砂粒少含)	口縁部1/12	
70	9-7	d-10	ＳＫ25	土師器小皿	9.0	1.6	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ナデ	灰黄褐(10YR6/2)	やや密(0.5mmの砂粒、雲母少含)	口縁部2/12	
71	10-1	d-10	ＳＫ25	土師器羽釜	27.6	—	鍔径31.0	外面ヨコナデ 内面工具ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	やや粗(１mmの砂粒、雲母含)	口縁部1/12	内外面に煤付着。大和型。
72	14-2	d-10	ＳＫ25	土師器羽釜	24.4	—	鍔径28.2	工具ナデ	外:にぶい橙(5YR7/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	密	口縁部5/12 鍔部4/12	大和型。
73	11-3	d-10	ＳＫ25	瓦器椀	14.0	—	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	灰黄(2.5Y7/2)	密(金雲母含)	口縁部1/12	
74	11-1	d-10	ＳＫ25	瓦器椀	15.2	—	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部2/12	

第４表　出土遺物観察表②

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
75	11-4	d-10	ＳＫ25	瓦器椀	15.0	—	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	灰黄（2.5Y7/2）	密（金雲母含）	口縁部3/12	
76	10-7	d-10	ＳＫ25	瓦器椀	16.6	—	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	外：灰（N4/） 内：灰（N5/）	密（金雲母）	口縁部3/12	
77	9-5	d-10	ＳＫ25	瓦器椀	15.0	—	—	外面ユビオサエ 内面ミガキ	灰（N4/）	やや密（0.5mmの砂粒少含）	口縁部1/12	
78	11-2	d-10	ＳＫ25	瓦器椀	15.0	—	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	灰（N4/）	やや密（1mmの砂粒、雲母含）	口縁部1/12	
79	9-6	d-10	ＳＫ25	瓦器椀	—	—	高台径6.0	外面ユビオサエ 内面ミガキ	灰白（2.5Y8/1）	密	高台部2/12	
80	11-6	d-10	ＳＫ25	瓦器皿	9.0	1.6	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	灰（N5/）	やや密（0.5mmの砂粒、雲母少含）	口縁部4/12 底部4/12	内面底部に暗文。
81	11-5	d-10	ＳＫ25	瓦器皿	9.8	1.6	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	灰（N4/）	密（金雲母含）	口縁部2/12 底部2/12	内面底部に暗文。
82	10-5	d-10	ＳＫ25	瓦器皿	10.0	—	—	外面ユビオサエ、ナデ	灰（N5/）	やや密（1mmの砂粒含）	口縁部2/12	内面底部に暗文。
83	10-4	d-10	ＳＫ25	瓦器皿	8.0	1.4	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	外：灰（N5/） 内：灰（N6/）	密	口縁部2/12	内面底部に暗文。
84	12-6	d-9	ＳＫ26	瓦器椀	15.0	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰（N5/）	やや密（1mmの砂粒含）	口縁部1/12	
85	12-7	d-9	ＳＫ26	土師器鍋	16.0	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰（N4/）	密	口縁部1/12	
86	13-2	d-9	ＳＫ27	土師器小皿	9.8	—	—	外面オサエ 内面ヨコナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	密（微細粒含）	口縁部2/12	
87	13-1	d-9	ＳＫ27	瓦器椀	15.0	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰（N5/）	密	口縁部3/12	
88	13-7	d-9	ＳＫ25	瓦器椀	15.6	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰（N5/）、灰白（7.5Y8/1）	密	口縁部2/12	
89	10-2	d-9	ＳＫ29	瓦器椀	9.3	—	—	ヨコナデ	灰（N5/）	密	口縁部2/12	内面底部に暗文。小椀。
90	14-1	d-11	ＳＫ30	瓦器椀	14.4	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰（N4/）	密	口縁部1/12	
91	11-7	d-10	ＳＫ31	瓦器椀	15.0	—	—	内外面ミガキ	灰（N4/）	密	口縁部1/12	
92	13-4	e-5	ＳＫ34	土師器羽釜	—	—	鍔径38.0	外面ヨコナデ 内面工具ナデ	にぶい黄橙（10YR6/3）	密（2mmの砂粒含）	鍔部1/12	大和型。
93	13-3	e-5	ＳＫ35	瓦器椀	14.6	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰（N5/）	密	口縁部1/12	
94	13-5	e-5	ＳＫ34	瓦器小皿	8.0	1.0	—	外面オサエ	灰（N5/）	密	口縁部1/12	内面底部に暗文。
95	10-3	e-4	ＳＫ35	瓦器皿	8.0	1.2	—	外面ユビオサエ	灰（N5/）	やや密	口縁部3/12	内面底部に暗文。
96	17-4	b-12	ＳＤ38	瓦器椀	16.6	—	—	外面オサエ、ナデ	黒（N2/）	密（雲母含）	口縁部1/12	
97	17-1	d-4	ｐｉｔ２	土師器皿	9.0	1.1	—	ナデ	外：灰黄（2.5Y6/2） 内：灰白（2.5Y8/2）	密（雲母含）	口縁部2/12	
98	18-3	f-4	ｐｉｔ１	土師器皿	9.4	—	—	ナデ、オサエ	外：にぶい黄橙（10YR7/3） 内：にぶい黄橙（10YR7/4）	やや密（0.5mmの砂粒少含）	口縁部1/12	
99	20-3	f-4	ｐｉｔ１	瓦器皿	9.6	—	—	外面オサエ 内面ナデ	灰（N4/）	やや密（0.5mmの砂粒極少含）	口縁部1/12	内面底部に暗文。
100	26-7	d-10	ｐｉｔ６	土師器小皿	8.5	1.1	—		にぶい黄橙（10YR6/3）	密	口縁部1/12	
101	18-4	d-9	ｐｉｔ１	土師器皿	9.0	—	—	ナデ、オサエ	外：浅黄橙（10YR8/4） 内：にぶい黄橙（10YR7/4）	やや密（0.5mmの砂粒少含）	口縁部1/12	
102	18-7	d-9	ｐｉｔ１	土師器鍋	30.6	—	—	外面ヨコナデ 内面ナデ	外：にぶい橙（7.5YR7/4）・灰黄褐（10YR6/2） 内：にぶい黄橙（10YR7/3）・灰黄褐（10YR4/2）	やや密（1mmの砂粒・雲母少含）	口縁部1/12	
103	18-6	d-9	ｐｉｔ１	土師器羽釜	24.0	—	—	ナデ	外：にぶい黄（2.5Y6/3） 内：にぶい黄橙（10YR6/3）	やや密（1mmの砂粒・雲母少含）	口縁部1/12	大和型。
104	19-1	e-10	ｐｉｔ１	瓦器椀	15.0	—	—	外面ナデ、オサエ、ミガキ 内面ミガキ	外：灰（N4/）・灰白（7.5Y7/1） 内：灰（N5/）	やや密（0.5mmの砂粒少含）	口縁部1/12	
105	19-4	e-10	ｐｉｔ１	瓦器椀	15.0	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	外：灰（N4/） 内：灰（N5/）	やや密	口縁部1/12	
106	19-3	d-9	ｐｉｔ１	瓦器椀	15.0	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	外：灰（7.5Y5/1） 内：灰（N5/）	やや密（0.5mmの砂粒少含）	口縁部1/12	
107	19-7	d-9	ｐｉｔ１	瓦器椀	15.0	—	—	外面ナデ、オサエ 内面ミガキ	暗灰（N3/）	やや密（0.5mmの砂粒・雲母少含）	口縁部1/12	
108	24-6	e-9	ｐｉｔ２	瓦器椀	15.6	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	外：淡黄（2.5Y8/3） 内：浅黄橙（7.5YR8/3）	密	口縁部1/12	
109	24-7	e-9	ｐｉｔ２	瓦器椀	14.6	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	暗灰（N3/）	密	口縁部1/12	
110	26-5	d-10	ｐｉｔ６	瓦器椀	15.5	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰（N4/）	密	口縁部1/12	
111	19-6	d-10	ｐｉｔ11	瓦器椀	15.0	—	—	外面ナデ、オサエ 内面ミガキ	灰（N5/）	やや密	口縁部1/12	
112	26-4	d-10	ｐｉｔ６	瓦器椀	15.0	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰（N5/）	密	口縁部1/12	

第５表　出土遺物観察表③

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
113	26-3	d-10	pit6	瓦器 椀	13.6	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部1/12	
114	19-8	d-10	pit11	瓦器 椀	15.4	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	やや密(0.5㎜の砂粒少含)	口縁部2/12	
115	17-6	c-9	pit2	瓦器 椀	15.6	—	—	外面工具ナデ、オサエ 内面ミガキ	暗灰(N3/)	密(雲母含)	口縁部1/12	
116	26-6	d-10	pit6	瓦器 椀	15.0	—	—	外面オサエ	浅黄橙(10YR8/4)	密	口縁部1/12	内面摩耗のため、調整不明瞭。
117	20-5	d-11	pit10	瓦器 椀	—	—	高台径 8.6	外面ナデ、オサエ	暗灰(N3/)	やや密	高台部1/12	内面底部に暗文。
118	20-7	d-9	pit2	瓦器 椀	—	—	高台径 5.2	外面オサエ 内面ナデ	外:淡黄(2.5Y8/3)・灰(5N/) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)・灰(N4/)	やや密(0.5㎜の砂粒・雲母極少含)	高台部6/12	内面底部に暗文。
119	20-2	d-9	pit1	瓦器 皿	9.2	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	外:灰(N5/) 内:灰(5Y6/1)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	口縁部1/12	
120	20-4	d-9	pit2	瓦器 皿	8.6	—	—	外面ナデ、オサエ 内面ナデ	灰(N5/)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	口縁部2/12	内面底部に暗文。
121	24-8	e-9	pit2	瓦器 小皿	9.3	1.6	—	外面オサエ 内面ナデ	灰(N4/)	密	口縁部3/12	内面底部に暗文。
122	36-1	f-4	SK6	土師器 鍋	25.2	—	体部径 26.4	工具ナデ、ケズリ、ナデ	外:にぶい黄(7.5YR7/4)・にぶい黄橙(10YR7/4) 内:灰黄褐(10YR5/2)	密(3㎜の砂粒含)	口縁部3/12 体部3/12	外面煤付着。
123	5-3	c-3	SK14	土師器 鍋	30.0	—	—	ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	密、2㎜の砂粒含	小片	
124	35-3	c-3	SK14	土師器 鍋	24.0	—	—	外面ハケ 内面ナデ	外:にぶい黄橙(10YR6/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)・にぶい黄褐(10YR5/3)	やや密(0.5㎜の砂粒少含)	口縁部1/12	外面煤付着。
125	5-2	c-3	SK14	瓦器 小皿	8.0	1.3	—	ヨコナデ、ナデ	灰白(2.5Y8/2)	密	口縁部3/12	内面底部に暗文。
126	1-2	c-3	SK14	鉄製品 釘	長さ 5.2	幅 1.4	厚さ 1.3	—	—	—	—	
127	21-5	d-4	pit2	砥石	長さ 12.2	幅 4.8	重さ 295	—	—	—	—	砂岩。
128	24-4	d-10	pit1	土師器 小皿	8.5	1.2	—	外面ナデ 内面ヨコナデ	外:橙(7.5YR6/6) 内:にぶい橙(10YR6/3)	密(微砂粒含)	口縁部1/12	
129	24-5	d-10	pit1	土師器 小皿	9.0	1.9	—	外面ヨコナデ 内面ナデ	橙(7.5YR7/6)	密(2㎜の砂粒含)	口縁部2/12	
130	18-2	c-2	pit2	土師器 皿	9.0	—	—	ナデ、オサエ	にぶい黄橙(10YR7/4)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	小片	
131	25-3	d-10	pit2	土師器 小皿	9.4	—	—	外面オサエ 内面ヨコナデ	にぶい橙(2.5YR6/4)	密(2㎜の砂粒少含)	口縁部1/12	
132	25-4	d-10	pit2	土師器 小皿	8.4	1.6	—	外面オサエ 内面ナデ	にぶい橙(10YR7/4)	密(微砂粒含)	完形	
133	18-5	c-11	pit2	土師器 皿	8.8	—	—	外面オサエ 内面ナデ	外:にぶい黄橙(7.5YR7/6) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	口縁部1/12	
134	18-1	e-10	pit3	土師器 皿	9.0	—	—	ナデ、オサエ	にぶい黄橙(10YR7/4)	やや密(1㎜の砂粒含)	口縁部2/12	
135	21-2	c-9	pit4	土師器 皿	14.0	2.7	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ヨコナデ	灰黄(2.5Y7/2)	やや密(金雲母多含)	口縁部6/12	内外面に煤付着。墨痕有。口縁部2段ナデ。
136	25-5	d-10	pit3	瓦器 椀	14.6	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部4/12	内面底部に暗文。
137	24-1	e-9	pit1	瓦器 椀	13.3	—	—	外面ユビオサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部3/12	内面底部に暗文。
138	26-1	d-10	pit4	瓦器 椀	15.0	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部3/12	
139	19-2	d-9	pit5	瓦器 椀	15.0	—	—	外面ナデ、オサエ、ミガキ 内面ミガキ	外:灰(N4/)・灰白(7.5Y7/1) 内:灰(N4/)・灰白(7.5Y7/1)	やや密(0.5㎜の砂粒・雲母少含)	口縁部1/12	
140	19-5	d-10	pit9	瓦器 椀	15.0	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	口縁部1/12	
141	26-2	d-10	pit4	瓦器 椀	14.0	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部1/12	
142	20-6	d-10	pit12	瓦器 椀	—	—	高台径 5.8	外面ナデ、オサエ 内面ミガキ	外:暗灰(N3/)・灰(5N/) 内:灰(N4/)・灰白(7.5Y7/1)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	高台部8/12	内面底部に暗文。
143	20-9	d-10	pit12	瓦器 椀	—	—	高台径 5.6	外面ナデ、オサエ 内面ナデ	灰(N4/)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	高台部3/12	内面底部に暗文。
144	20-8	d-10	pit12	瓦器 椀	—	—	高台径 4.2	外面ナデ、オサエ 内面ナデ	外:灰(7.5Y4/1) 内:オリーブ黒(7.5Y3/1)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	高台部9/12	内面底部に暗文。
145	17-8	e-5	pit1	瓦器 椀	—	—	底径 4.9	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	外:暗灰(N3/) 内:灰(N4/)	密(細砂粒、雲母含)	底部12/12	内面底部に暗文。
146	24-2	d-10	pit1	瓦器 椀	14.0	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部2/12	
147	25-2	d-10	pit2	瓦器 椀	14.0	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部2/12	
148	25-1	d-10	pit2	瓦器 椀	14.6	4.1	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部5/12	内面底部に暗文。
149	31-1	c-9	pit8	瓦器 椀	15.0	—	—	外面ナデ、オサエ 内面ミガキ	外:灰(N5/) 内:灰(7.5Y6/1)	密(雲母含)	口縁部1/12	
150	20-1	c-6	pit1	瓦器 椀	15.2	—	—	外面ナデ、オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	やや密(0.5㎜の砂粒極少含)	口縁部1/12	

第6表　出土遺物観察表④

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
151	24-3	d-10	pit1	土師器 椀	15.0	—	—	ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部1/12	
152	25-6	d-10	pit3	土師器 小皿	10.0	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部1/12	内面底部に暗文。
153	23-5	d-9	包含層	土師器 皿	8.8	1.5	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ナデ	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:にぶい橙(2.5YR6/4)	やや密(金雲母含)	口縁部2/12	
154	15-4	c-10	包含層	土師器 小皿	8.0	—	—	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	密(微細粒含)	口縁部1/12	
155	28-1	e-5	包含層	土師器 皿	14.9	—	高台径5.7	外面オサエ 内面ナデ	灰白(10YR8/2)	密	口縁部3/12	
156	27-3	d-10	包含層	土師器 羽釜	24.3	—	鍔径32.2	外面ナデ 内面ハケ	にぶい黄橙(10YR7/3)	密	口縁部1/12 鍔部1/12	外面煤付着。大和型。
157	14-3	e-5	包含層	土師器 羽釜	29.6	—	鍔径37.6	ヨコナデ、工具ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	密(1.5mmの砂粒含)	口縁部少量 鍔部1/12	鍔部に煤付着。大和型。
158	36-2	d-9	包含層	土師器 羽釜	27.2	—	鍔径30.6	外面工具ナデ、ケズリ 内面工具ナデ	外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	密(2.5mmの砂粒含)	口縁部4/12 鍔部3/12	外面煤付着。大和型。
159	16-1		表土	土師器 羽釜	25.8	—	鍔径31.2	ナデ	外:黒褐(10YR3/2) 内:にぶい黄褐(10YR5/4)	密(細砂粒、雲母多含)	口縁部2/12 鍔部1/12	大和型。
160	27-1	d-9	包含層	土師器 羽釜	24.2	—	鍔径31.8	外面ケズリ 内面工具ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	密(砂粒多含)	口縁部2/12 鍔部4/12	外面煤付着。大和型。
161	16-2		表土	土師器 羽釜	28.0	—	—	ナデ	にぶい黄橙(10YR5/3)	密(細砂粒、雲母多含)	口縁部2/12	煤付着。大和型。
162	23-1	d-9	包含層	土師器 羽釜	30.0	—	—	ヨコナデ	外:にぶい橙(5YR6/4) 内:灰黄(7.5YR6/2)	やや密(金雲母多含)	口縁部2/12	大和型。
163	27-2	d-10	包含層	土師器 羽釜	24.4	—	鍔径28.9	工具ナデ	黄橙(10YR8/6)	密(3mmの小石含)	口縁部2/12 鍔部1/12	外面煤付着。大和型。
164	22-3	d-10	包含層	土師器 羽釜	25.8	—	鍔径30.0	外面ナデ 内面工具ナデ	外:浅黄橙(2.5Y8/4) 内:にぶい黄橙(5YR7/4)	やや粗(2mmの砂粒含)	口縁部1/12 鍔部1/12	大和型。
165	22-4	d-9	包含層	土師器 羽釜	30.0	—	鍔径33.2	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	やや密(金雲母多含)	口縁部1/12 鍔部1/12	大和型。
166	28-7	d-9	包含層	土師器 羽釜	—	—	—	ヨコナデ	にぶい褐(7.5YR6/3)	やや密(砂粒・2mmの小石含)	小片	大和型。
167	33-8	d-10	包含層	陶器 椀	—	—	高台径10.0	ロクロナデ	外:灰白(5Y7/2) 内:灰黄(2.5Y7/2)	やや密(1mmの砂粒少含)	高台部3/12	山茶椀。渥美産。内面底部擬れている。
168	34-5		表土	陶器 椀	16.0	—	—	ロクロナデ	釉:オリーブ黄(7.5Y6/3) 素地:灰白(7.5Y7/1)	密	口縁部2/12	古瀬戸平椀。
169	33-9	b-4	包含層	土師	—	—	—	—	暗灰黄(2.5Y5/2)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	—	
170	15-3	c-10	包含層	瓦器 椀	16.0	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部3/12	内面底部に暗文。
171	34-2	d-10	包含層	瓦器 椀	15.4	4.8	高台径5.8	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部4/12 高台部6/12	内面底部に暗文。
172	21-6	d-9	包含層	瓦器 椀	15.0	5.0	高台径6.4	外面ユビオサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部3/12 高台部3/12	内面底部に暗文。
173	37-3	d-9	包含層	瓦器 椀	15.0	4.9	高台径6.2	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部3/12 高台部6/12	内面底部に暗文。
174	37-2	d-9	包含層	瓦器 椀	16.0	4.9	高台径6.2	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部3/12 高台部5/12	内面底部に暗文。
175	30-4	d-9	包含層	瓦器 椀	15.6	—	高台径5.9	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N6/)	密	口縁部2/12 高台部12/12	
176	29-5	d-9	包含層	瓦器 椀	15.2	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部2/12	
177	22-1	d-9	包含層	瓦器 椀	15.0	—	—	ミガキ	灰(N5/)	密(0.5mmの砂粒含)	口縁部1/12	
178	28-6	d-9	包含層	瓦器 椀	14.8	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/0)	密	口縁部2/12	
179	29-3	d-9	包含層	瓦器 椀	15.3	—	—	ミガキ	灰(N4/0)	密	口縁部2/12	
180	15-1	d-11	包含層	瓦器 椀	13.8	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部1/12	
181	29-1	d-9	包含層	瓦器 椀	14.9	—	—	ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部2/12	
182	29-2	d-9	包含層	瓦器 椀	14.8	—	—	ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部2/12	
183	23-4	d-9	包含層	瓦器 椀	14.6	—	—	外面ユビオサエ、ミガキ 内面ミガキ	灰(N4/)	密(金雲母含)	口縁部3/12	
184	30-2	d-9	包含層	瓦器 椀	15.3	—	—	外面オサエ、ミガキ 内面ミガキ	青灰(5PB5/1)	密(砂粒含)	口縁部1/12	
185	30-3	d-10	包含層	瓦器 椀	14.2	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	青灰(5PB5/1)	密	口縁部2/12	
186	28-3	f-5	包含層	瓦器 椀	14.6	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	青灰(5PB5/1)	密	口縁部1/12	
187	23-2	d-9	包含層	瓦器 椀	15.4	—	—	外面ユビオサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	密(金雲母含)	口縁部4/12	
188	22-6	d-9	包含層	瓦器 椀	15.0	—	—	外面ユビオサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部2/12	
189	28-4	f-6	包含層	瓦器 椀	14.2	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	暗青灰(5PB4/1)	密	口縁部3/12	

第7表　出土遺物観察表⑤

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種器形	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
					口径	器高	その他					
190	37-4	d-9	包含層	瓦器椀	14.8	4.3	高台径5.6	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部3/12 高台部6/12	内面底部に暗文。
191	21-1	d-10	包含層	瓦器椀	16.0	4.6	高台径7.7	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N5/)	やや粗(0.5mmの砂粒少含)	口縁部4/12 高台部3/12	内面底部に暗文。
192	21-3	d-10	包含層	瓦器椀	15.0	—	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	黒(N2/)	密(金雲母多含)	口縁部1/12	内面底部に暗文。
193	28-5	d-4	包含層	瓦器椀	—	—	高台径5.8	内面ナデ 内面ミガキ	暗青灰(5PB4/1)	密(2mmの小石含)	高台部3/12	内面底部に暗文。
194	29-4	d-9	包含層	瓦器椀	—	—	高台径5.7	—	灰(N5/)	密	高台部6/12	
195	38-1	d-9	包含層	瓦器椀	—	—	高台径5.6	外面ロクロナデ 内面ミガキ	灰(N5/)	密、細砂粒と雲母含	高台部12/12	内面底部に暗文。
196	30-1	d-9	包含層	瓦器椀	—	—	高台径5.2	外面オサエ	灰(N5/)	密	高台部6/12	
197	17-7		表土	瓦器椀	—	—	底径3.9	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	密(細砂粒、雲母含)	底部12/12	内面底部に暗文、高台欠損。
198	15-2	d-11	包含層	瓦器椀	14.8	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N5/)	密	口縁部2/12	
199	22-2	d-10	包含層	瓦器椀	15.0	—	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N5/)	密(0.5mmの砂粒含)	口縁部2/12	
200	17-5		表土	瓦器椀	14.6	—	—	外面ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)灰白(10YR8/2)	密(雲母含)	口縁部1/12	
201	21-4	d-10	包含層	瓦器椀	15.0	—	—	外面ユビオサエ、ナデ 内面ミガキ	暗灰(N3/)	密	口縁部1/12	
202	28-2	e-5	包含層	瓦器椀	14.0	—	—	外面オサエ 内面ミガキ	灰(N4/0)	密(1mmの小石含)	口縁部1/12	
203	23-3	d-9	包含層	瓦器皿	10.0	2.1	—	外面ユビオサエ 内面ミガキ	灰白(10YR8/2)	密	口縁部1/12	
204	22-5	d-9	包含層	瓦器皿	9.0	—	—	外面ユビオサエ	灰(N4/)	密(0.5mmの砂粒含)	口縁部3/12	内面底部に暗文。
205	31-4	試掘No.5		土師器皿	9.0	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ナデ	外:橙(7.5YR7/6) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	密(雲母含)	口縁部2/12	
206	33-5	試掘No.5		土師器小皿	8.2	1.6	—	オサエ、ナデ	外:黄灰(2.5YR6/1)・灰黄(2.5Y6/2) 内:灰黄(2.5Y6/2)	やや密(0.5mmの砂粒、雲母含)	口縁部6/12	底部に植物の圧痕有。
207	31-3	試掘No.5		土師器皿	9.6	—	—	外面ナデ、オサエ 内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	密(雲母含)	口縁部15/12	
208	33-4	試掘No.5		土師器小皿	9.1	1.8	—	オサエ、ナデ	外:浅黄(2.5Y7/3)・灰(5Y4/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	やや密(0.5mmの砂粒少含)	口縁部6/12	
209	31-2	試掘No.5		土師器皿	14.0	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ナデ	外:灰黄褐(10YR4/2) 内:にぶい橙(5YR6/4)	密(細砂粒・雲母含)	口縁部2/12	
210	32-1	試掘No.5		瓦器椀	14.6	4.5	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	外:黒(N2/) 内:灰(5Y5/1)	密(雲母含)	口縁部2/12	内面底部に暗文。
211	34-3	試掘No.5		瓦器椀	16.0	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	外:にぶい黄橙10YR7/4・灰5Y4/1・黒N1.5 内:褐灰N3/・にぶい黄橙10YR7/3	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部4/12	内面底部に暗文。
212	32-3	試掘No.5		瓦器椀	14.6	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	密	口縁部2/12	内面底部に暗文。
213	32-4	試掘No.5		瓦器椀	15.6	5.0	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N5/)	密(雲母含)	口縁部3/12	内面底部に暗文。
214	31-8	試掘No.5		瓦器椀	13.4	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	密(雲母含)	口縁部2/12	
215	32-2	試掘No.5		瓦器椀	14.6	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	密(雲母含)	口縁部1/12	内面底部に暗文。
216	32-5	試掘No.5		瓦器椀	14.6	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)・ 浅黄橙(7.5YR8/3)	密(雲母少含)	口縁部3/12	
217	31-7	試掘No.5		瓦器椀	13.8	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	密(雲母少含)	口縁部1/12	
218	34-1	試掘No.5		瓦器椀	15.0	4.0	高台径5.4	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	やや密(0.5mmの砂粒少含)	口縁部2/12 高台部3/12	内面底部に暗文。
219	31-6	試掘No.5		瓦器椀	15.0	—	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	暗灰(N3/)	密	口縁部2/12	
220	31-5	試掘No.5		瓦器椀	13.6	4.0	高台径5.0	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	灰(N4/)	密(細砂粒・雲母含)	口縁部1/12 高台部2/12	内面底部に暗文。
221	33-7	試掘No.5		瓦器皿	9.0	1.5	—	外面オサエ 内面ナデ	灰(N5/)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	口縁部7/12	内面底部に暗文。
222	33-6	試掘No.5		瓦器皿	9.2	1.8	—	外面オサエ 内面ナデ	灰(N5/)	やや密(0.5mmの砂粒極少含)	完形	内面底部に暗文。
223	31-9	試掘No.5		瓦器皿	8.6	1.7	—	外面オサエ、ナデ 内面ミガキ	暗灰(N3/)	密(雲母含)	口縁部2/12	内面底部に暗文。

第8表　出土遺物観察表⑥

V 結　　語

1　屋敷地と建物内土坑

今回の調査で、3棟の掘立柱建物が確認された。3棟は棟方向の違いはあれ、いずれもN11°Wの向きに建てられている。また出土した土器のほとんどが、鎌倉時代の前半であることから、調査区全体が、この時期の屋敷地であった可能性が想定される。また、調査区外へと続くSB47以外の2棟については、建物内に浅く、径が2m以上の大きな土坑が確認された。ただSB46については、SK14が北東に位置し、SB48については、SK25は南へと建物外にはみ出る形で位置している。いわゆる南東隅土坑ではない。しかし、土坑を伴う掘立柱建物が平安時代末から鎌倉時代にかけて急速に広まり、この時期が最盛期であること[1]、伊賀市の西沖遺跡では、これより50年ほど先行した時期に建物内土坑がみられること[2]、そういった時代の中で、上長瀬遺跡が山間部にあり、名張の平地部と伊勢本街道を結ぶ中間地であることなどを鑑みると、既として利用されていた建物内土坑ではないかと考える。また、SB48内にあるSK25からは多量の石が、組まれてはいない形で検出され、そのなかには被熱を帯びたものも少なくはなかった。これらのみで断定することはできないが、可能性の一つとして、建物の屋根が板葺で、その重石として使われていたものが、何らかの理由で火事に遭い、屋敷が破棄されたものと考えられなくもない。またSK45からは焼土が多量に検出された。しかしSK45自体は焼土坑ではなく、遺構表面が被熱を帯びた様子はなかった。近くには遺構番号はついてはいないが、焼土坑があり、これらの遺構が関係している可能性も考えられる。

2　出土遺物について

瓦器　今回出土した遺物のほとんどは瓦器である。このことはこの地が畿内の一角であることを意味している。また瓦器椀は4・5・6期のもので、それと共伴して瓦器皿が出土している。瓦器皿は、内面底部に格子状の暗文が密に施されているものが多い。伊賀市の浮田遺跡や才良遺跡[3]、城之越遺跡[4]の共伴例をみても、12世紀後半のものであると考えられる。上長瀬遺跡より名張川下流約8km下流、青蓮寺川との合流点でちょうど名張の平地部に出たところにある糸川橋遺跡[5]では、今回出土した瓦器椀・皿と同時期の瓦器椀・皿が多量に出土している。さらに名張川を上流に遡った太郎生の多くの遺跡でも中世の遺物は山茶椀ではなく瓦器が出土している[6]。このことは名張川流域は基本的に瓦器を使用していたということで、また名張川沿いに名張の平地部との交流が盛んに行われていたということを意味している。

大和型土師器羽釜　鍋系の土器として、今回出土したその多くは羽釜である。またこの羽釜は、実測できたものがすべて大和型に相当しており、瓦器の例とともに畿内の一角であるということを十分に立証するものである。口縁部が「く」の字形に外反する大和B型は、先述の浮田遺跡、才良遺跡、城之越遺跡、糸川橋遺跡に加え、名張市の脇ノ田遺跡[7]、城屋敷遺跡[8]でも相当するものが出土している。この時代に伊賀では広く使用されていたことがわかる。

伊勢方面の土器　出土遺物の中に、渥美産の陶器練鉢、山茶椀があり、また南伊勢産の土師器鍋がある。このことは畿内の一角であるとともに、伊勢方面との交流があり、山間部ではあるが、それゆえ交通上の往来がなされるうえで、この地が中間地点として、重要な地の一つであったということが考えられる。

温石　今回出土した温石であるが、伊賀地方では初めてとなる。三重県内では、斎宮跡[9](明和町)、木造赤坂遺跡[10](津市)、岩出遺跡群[11](玉城町)など数例である。出土した温石は長崎県の西彼杵半島産の滑石製石鍋を転用したものと考えられる[12]。滑石製石鍋の転用は斎宮跡、木造赤坂遺跡でも見られている。今回の石鍋は、鍔の形状から木戸雅寿氏の編年による Ⅲ類・a・1に相当し、12世紀であろうか。西彼杵半島産の滑石製石製品の流通は瀬戸内を通り遠く畿内まで及んでいたが、山間の地まで届いていたことは、九州地方の影響を考えるうえで非常に重要なものであると考えることができる。

14世紀以降の土器　12世紀後半から13世紀前半の遺物が主体となるなかで、ＳＫ６から14世紀初頭の土師器鍋が、包含層から14世紀後半の古瀬戸平椀が出土しており、またＳＫ14からの出土であるが、包含層扱いの15世紀前半の土師器鍋がある。実測できたものはわずか３点であるが、その存在は調査地に限らと、屋敷地として繁栄していた12世紀後半から13世紀前半のその後も、生活地としては続いていたことを示している。あるいは生活の拠点となる場所が、調査地から移動したのかもしれない。いずれにせよ、少なくとも15世紀までは生活が断絶したわけではないのである。

切石について　ＳＫ25から出土した石のなかで、切石がある。第Ⅱ章でも記述したが、今も残るこの時代の石造物は多い。石造の文化が盛んななかで、今回切石が出土していることから、近くに石切り場が存在したことも想定される。

3　調査地の時代背景

神宮領「六箇山」は平安時代末期に平頼盛の所領となったとされている[13]。「六箇山」の初見は「中右記[14]」天仁元年(1108年)であるが、「吾妻鏡[15]」によると、平頼盛は平氏が没落した後も源頼朝に厚遇を受け、寿永３年(1184年)領地を確保された際、「六箇山」は頼盛の所領となったとされている。今回の調査から出土したものは、鎌倉時代前半のものがほとんどであり、こういった時代背景がどう関わるかは判断できない。しかし、この時代に発展したこの所領内での人々の暮らしを考えるうえで、貴重な成果であると考える。

4　礎石にかかわって

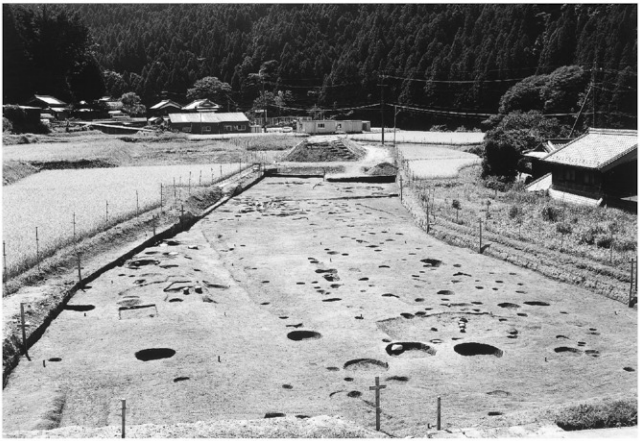
ＳＫ17とＳＫ13内にみられる小穴に直径40㎝の円形の石があり、その上面底部は平たい。高さはほぼ同じ、間は240㎝である。今回の調査区でみつかった他の柱穴とは形態がかなり違っている。地元の方の話では、昔、Ａ地区の東側、山の麓に寺があり、今も「寺山」と呼ばれている場所があるということである。またその地の地形は段々になっている。しかし、調査区から約200ｍ離れており、それがどれだけの規模であったかということまではわからず、また寺の敷地が今回の調査区まで広がっていたという話も聞かない。また、近世を示すものも出土していない。いずれにせよ、この２基だけで判断することはできないが、この遺構が検出された以上、寺に関連するかもしれない建物である可能性が考えられる。今後の調査を行う上で、注意すべき点である。

[註]

① 浅尾悟「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道1号亀山バイパス　埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』(1990年)
② 三重県埋蔵文化財センター『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告一第１分冊一』(1990年)
③ 三重県埋蔵文化財センター『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告一第３分冊一』(1990年)
④ 三重県埋蔵文化財センター『城之越遺跡』(1992年)
⑤ 名張市遺跡調査会『糸川橋遺跡』(1991年)
⑥ 美杉村教育委員会『三重県一志郡美杉村遺跡分布地図』(1996年)
⑦ 三重県教育委員会『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告一第1分冊一』(1989年)
⑧ 名張市教育委員会『城屋敷遺跡』(1985年)
⑨ 斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡平成８年度発掘調査概報』(1997年)
⑩ 三重県埋蔵文化財センター『木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告第1分冊』(2012年)
⑪ 三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(1996年)
⑫ 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中世土器の基礎研究Ⅸ中世前期の流通一瀬戸内・淀川水系を中心に一』(1993年)
⑬『日本歴史地名大系第24巻　三重県の地名』平凡社(1983年)
⑭『中右記』天仁元年（1108年）６月９日条
⑮『吾妻鏡』寿永３年（1184年）４月６日条

写真図版

上長瀬遺跡周辺地形（南側上空から）
［昭和22～23年頃米軍撮影］



A 地区全景（北から）

A 地区全景（南から）

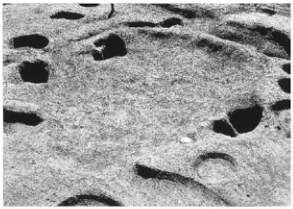
写真図版2

S B46（北から）

S B47（南から）

ＳＢ48（北から）

ＳＫ25 集石（北から）

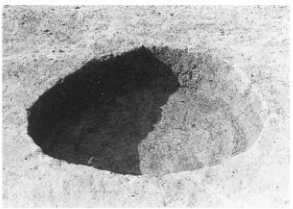


ＳＫ25 完掘状況（北西から）

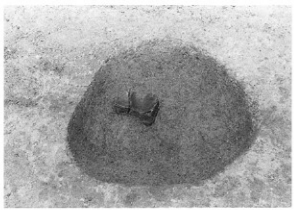
上長瀬遺跡周辺地形（南から）

上長瀬遺跡周辺地形（東から）

写真図版４

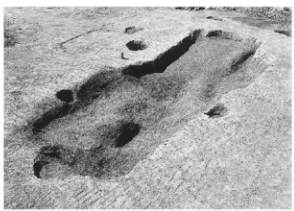


ＳＫ２（南から）

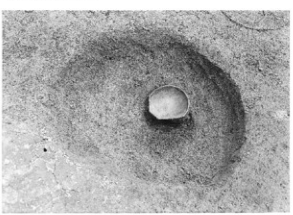


ＳＫ16 遺物出土状況（南から）

ＳＫ26（南から）



ＳＫ45（東から）

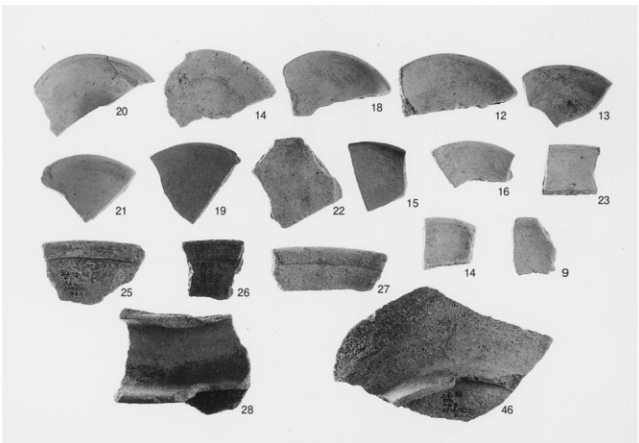


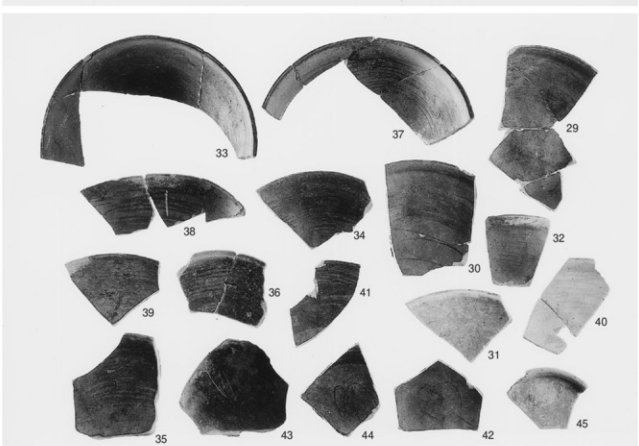
c9ｐｉｔ４（西から）

d10ｐｉｔ２（東から）

Ｂ地区全景（北から）

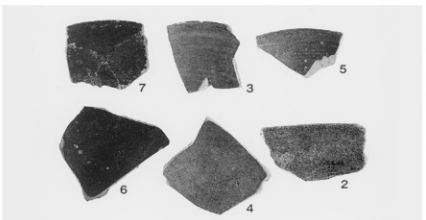
Ｂ地区全景（西から）

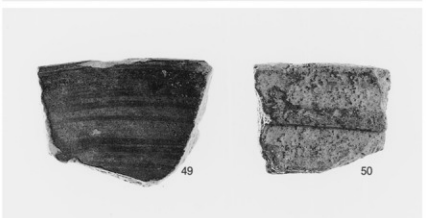

20
14
18
12
13
21
19
22
15
16
23
25
26
27
14
9
28
46

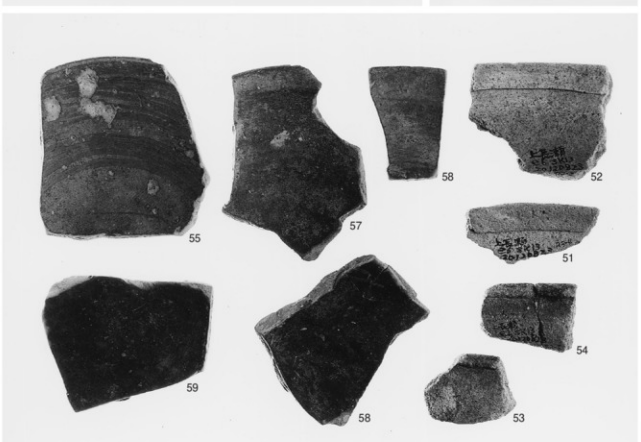

33
37
29
38
34
30
32
39
36
41
31
40
35
43
44
42
45

出土遺物

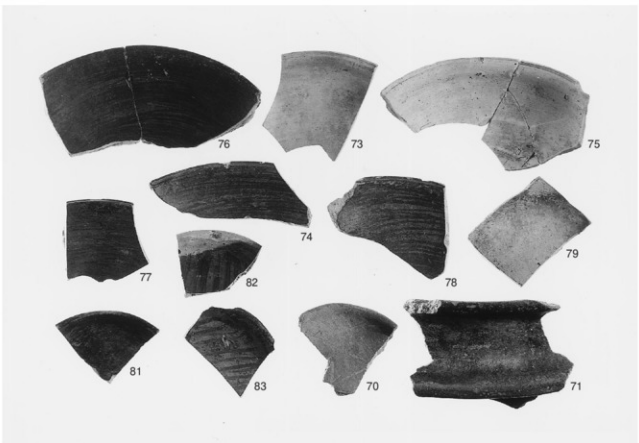
写真図版6



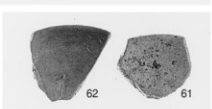




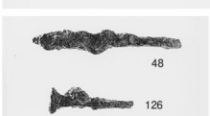
出土遺物


76
73
75
74
77
82
78
79
81
83
70
71

66
65
64

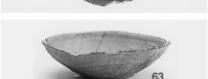

62
61

60


48
126

72

63

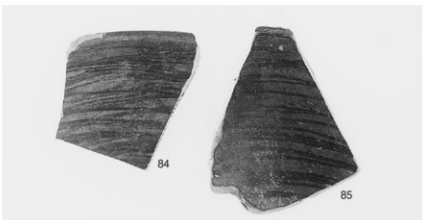

63

80

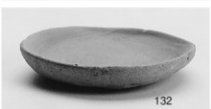
80

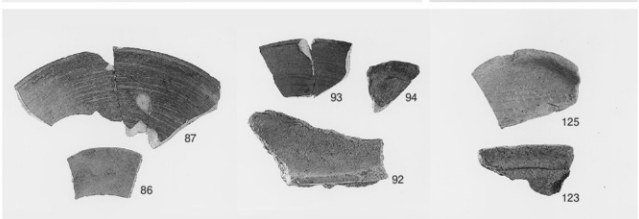
出土遺物

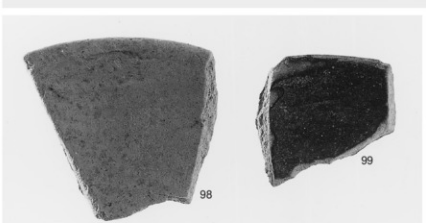
写真図版8


84
85

122


132


87
86
93
94
92
125
123


98
99

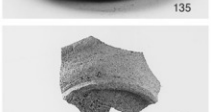
127

127

135

158

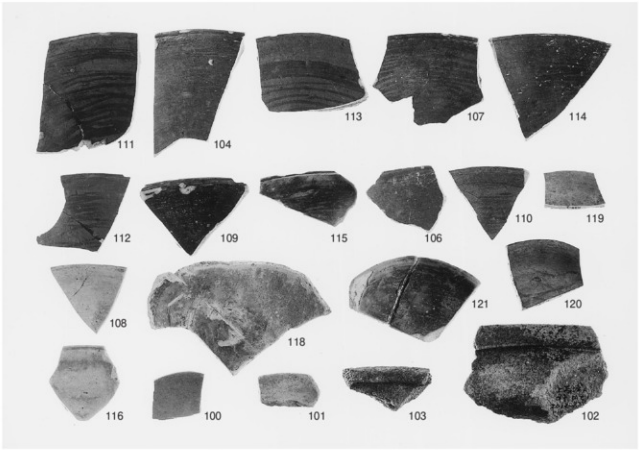
160

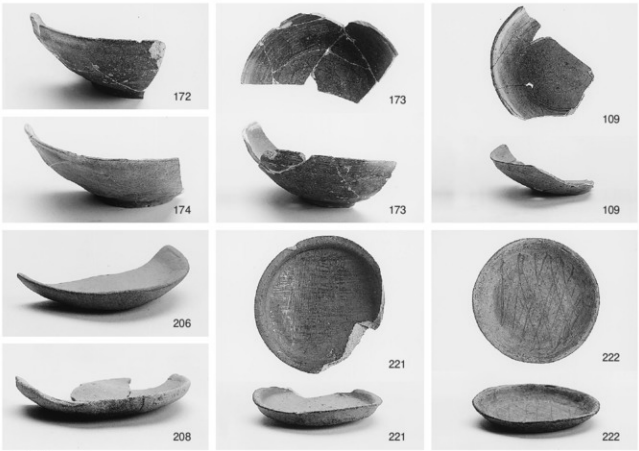

167

169

171

出土遺物


111
104
113
107
114
112
109
115
106
110
119
108
118
121
120
116
100
101
103
102


172
173
109
174
173
109
206
221
222
208
221
222

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみながせいせきはっくつちょうさほうこく
書名	上長瀬遺跡発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	346
編著者名	谷口文隆
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦２０１３年２月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
かみながせいせき 上長瀬遺跡	みえけんなばりしかみながせ 三重県名張市上長瀬	２０８	573	34° 34′ 46″	136° 10′ 20″	20120725～ 20121016	861	道路改良事業 (国)368号（上長瀬拡幅）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上長瀬遺跡	集落跡	鎌倉時代	建物内土坑 土坑 溝 小穴	温石 瓦器 土師器 山茶椀	

要約

上長瀬遺跡は名張川上流右岸の段丘上に位置する。本遺跡は集落跡である。集落は区画溝と掘立柱建物３棟によって構成されている。掘立柱建物には建物内土坑とみられる土坑を有しているものがある。遺物には石鍋を転用した温石があり、伊賀地域での出土は初めてで、県内では４例目となる。なお、瓦器が多量に出土するとともに、大和型の羽釜、伊勢方面の陶器、土師器が出土しており、山間部にありながら、他地域との強いつながりを示していると考えられる。

三重県埋蔵文化財調査報告３４６

上長瀬遺跡発掘調査報告

2014(平成26)年２月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　文化印刷